

『読我書樓長曆』翻刻(三)

—九州大学附属図書館蔵「吉村文庫」の研究〔Ⅱ〕—

荒木 龍太郎

関 幹雄

要旨

本稿は、幕末維新期の陽明学者の日記である『讀我書樓長曆』(天保二年一月一日～天保四年十二月二十九日)の翻刻である。

キーワード

吉村秋陽、幕末維新期、陽明学者、広島藩、佐藤一斎

*

*

*

本稿は、『讀我書樓長曆』翻刻(二)の継続である。なお、佚書である『讀我書樓長曆』二卷(天保元年八月～天保四年六月)は、翻刻の対象から外している。

凡例

○底本は、秋陽自筆『讀我書樓長曆』(九州大学附属図書館蔵「吉村文庫」本)である。

○活字化するにあたり、本文の文字は原則として本字に統一した。

○底本において割注・小字注で表記されている箇所については、本稿では「」を用いて表記した。

○読解の便をはかり、翻刻者の責任のもと句点・返り点を付した。また、() 内の記述も翻刻者に係る。

○注については、語彙についての注解は避け、固有名詞・地名についての言及に重きを置いた。

○虫損、その他の判読しがたい部分は□を用いて表記した。

○主に使用する参考文献について、予め書誌を挙げておく。本稿注では以下に示す略称で略記する。

『文章』＝『讀我書樓文章』(九州大学附属図書館蔵、吉村文庫1A2)

『吉村秋陽・東沢瀉』＝荒木龍太郎・荒木見悟『吉村秋陽・東沢瀉』(叢書・日本の思想家46、一九八二年、明德出版社)

『漢文學者總覽』＝長澤規矩也・長澤孝三『改訂増補 漢文學者總覽』(二〇一一年、汲古書院)

『升堂記』＝関山邦宏・橋本昭彦・高木靖文『「升堂記」(東京大学史料編纂所蔵) 翻刻ならびに索引』(平成八年度文部省科学研究費補助金課題番号08451068「近世における教育交流に関する基礎的研究」第一次報告書)

「翻刻」(一)＝『讀我書樓長曆』翻刻(一) (荒木龍太郎・関幹雄、『活水日文』61号、二〇二〇年、活水学院日本文学会)

「翻刻」(二)＝『讀我書樓長曆』翻刻(二) (荒木龍太郎・関幹雄、『活水日文』62号、二〇二二年、活水学院日本文学会)

『文集』＝『晦庵先生朱文公文集』(『朱子全書』第二十～第二十五冊、二〇〇二年、上海戸籍出版社・安徽教育出版社)

荒木龍太郎(活水女子大学 名誉教授)

関幹雄（都城工業高等専門学校 一般科目助教）

* * *

讀我書樓長曆 卷一（統）

天保二年 辛卯正月

朔 着「禮服」同「諸子」拜「先生及細君」。更同「山田生」入「城觀」入朝儀。午後試毫。「晴」。午後微陰。」

二日 午後出「城結髮浴」。「晴。」

三日 朝先生視「余大學旁釋及摘說」且命「入」祭酒公之門。「午後過」話「金花堂」。「晴和。」

四日 午後當直。「朝晴」。自「午前」到「晚陰翳。」

五日 朝到「金花堂」買「紙筆」且奎「睽閑事」。午後過「今治侯第」過「本多氏」賀「履端」。主人供「酒飯」。快話及「夜歸」。「晴。」

六日 當直到「午」。午後出「城結髮」。歸浴。夜諸子會「讀孟子」。諸子貽「余於唐宋八家讀本一部」。「陰晴不定。」

七日 午後入「司成林公之門」。「一齋先生紹介」。拜「公於邸」。

八日 自「午前」出「城」。過「眞光寺」賀「履端」。主僧以「女病」辭不見。

直到「本郷」過「前嶋玉置」氏「投名刺」而去。訪「前田生」又過「東氏」。小酌歸。至「大丸店」買「襦衣」。「晴。」

九日 寫「大學摘說」。「晴和。」

十日 終日作「家書」。「深町氏湯淺」二生。伯氏。永井姪。加藤生。「晚結髮」。過「金華堂」。歸路喫「蕎麥」。「晴和。」

十一日 午後赴「太田氏」託「家書」。歸路過「本邸」訪「加藤儒士」以「有」人「不」面而還。午後浴。赴「服部太夫之約」講「言志錄」。高濱玉井二生來。侍講後與「玉井生」論「學」。主人供「具頗豐」。晚雨。主人命「輿以與送歸」。歸塾將「二更」。「□陰」。晚雨。」

十二日 先生有「命」與「壯吉子興」草「中庸欄外書」上。夜諸子會「讀孟子」。「晴。」

十三日 當直。終日草「欄外書」。夜「二更畢」。「淡晴風。」

十四日 午前同「川田生」出「城結髮浴」。「淡陰。」

十五日 午後適「土岐氏」達「湯子亭」之託。又訪「小笠原氏」。壯吉千藏忠藏在「讀」書。會後有「酒飯」之供。傾談驩然。「二更踏」月還。「雨」。午後霽。」

十六日 朝到「渡邊源」三。午後易發會。夜諸子講「習孟子」。「陰。」

十七日 午前同「梅陂諸子」遊「墨沱江東梅莊」觀「梅」。「晴」。午後微

風。」

十八日 禮記輪講。夜書會讀。「晴。」

十九日 午後出「城結髮」。還赴「渡邊源三」待「摘說之改書」携歸。歸路會飲「本多氏」發會。鳴門之書到。面「清水赤城赤井巖三」。「陰。大風終日。」

二十日 午後過「眞光寺」。又課「業於下條氏」。今日爲「發會」。會之後留飲。「晴。」

二十一日 當直。夜孟子會讀。「陰。時雨點。」

二十二日 午後浴。「晴。」

二十三日 課如「常」。乞「改竄送」矢野生「序」。「陰。午後微雹。」

二十四日 午後出「城結髮浴」。歸與「川田生」赴「赤井東海」發會。路過「本多氏」同「主人」到「赤井」大飲。歸路又過「本多氏」喫茶而歸。「今日大雪。一三二尺。」

二十五日 午後課「業於下條氏」。先改竄。余送「矢野生」序。「終日雨雪。寒甚。」

二十六日 寫「序文」贈「矢野生」。高濱氏書至。午前陪「話先生」。午後易。「節」。夜儒子會「讀孟子」。「翳。」

二十七日 當直。夜出「城浴」。過「金花書舖」話「奎曄閣之事」。「陰雨不定。」

二十八日 午前午後侍講如「例」。「晴。」

二十九日 午後講「易於下條氏」。「晴。大風揚沙。」

二月朔 作「書託」矢野生「寄」梁訪詩禪及吉田作□。晚同「羽田山田生」出「城小酌浴」。夜諸子會「讀孟子」。「晴。」

二日 贈「別詩及附書於千里」。「淡陰。風。」

三日 常課不「異」。「淡陰。大暖。」

四日 荒井鳴門書自「先生」達。午後出「城結髮」。講「易於下條氏」。「快晴。」

五日 朝開「講於眞光寺」。寺主贈「一方金」。「晴。」

六日 午後易講義。「中孚」。晚出「城浴」。「晴。」

七日 當直。「陰雲。晚霞微雨□□。」

八日 午前禮記。傳習錄休。易。「晴。晚陰。」

九日 午後課業於小柳津生寓。「微雨。夜終大雨。」

十日 朝講易於眞光寺留飲。未牌歸塾。出城□至日參。夜同塾子詣芝口稻荷祠觀望。「微雨。午前雷。至夜快晴。」

十一日 同街風生出城。過詩佛老人示草稿及清書託刻侯四集（四葉か）。老人偶病不面。託門人而出。又過話華亭翁。唐津藩文學河田某呈草稿及託刻□清書而反。午飯小酌東叡山下酒樓。又訪村瀨誨輔。詣參節稻荷祠。直過東海遊墨江梅莊。梅花已充。遊人甚盛。□□浴。歸塾。夜諸子會讀孟子。「風氣和適。午後淡陰。」

十二日 朝詣東叡山讀小學。歸。終日當直。「午後陰。快晴和暖。」

十三日 先生微恙。止常課。午後寄愛日樓文詩一帙別作復書一通攜出城。先到日本橋下大阪屋託之送致鳴門。浴。結髮。過赤井巖爲過日伸謝。又過本多伯懋託復書於淀府。野坂源助□□三人對酌大醉。二更歸塾。聞晚服部大夫來言有密話。以余不在寄言於山田生而去。「晴。過暖。」

十四日 小柳生貽書休。今夕之講期以十九日。午後灸。過服太夫。又過牧直鄉不遇而歸。昨十三日地震。午後過暖。今日南風大起暖益甚如四五月之候。歸塾之後四肢發熱上逆遂臥。終又大風時雨。「晴。晚陰。」

十五日 今朝爲眞光寺課日以病不能往。暖益甚。余臥病猶昨。晚風少息又變爲東風。大雨一過暖漸減入夜如常候而余病頓痊如酒醒。「陰晴不定。晚雨。」

十六日 失履。先生病未痊休易講。朝適眞光寺講易。歸路買履。過金花堂清七不在。主人病臥不面。因託言於小奴適清七又作書於主人言珠文之事而去。夜諸子會讀孟子。「晴。」

十七日 朝講小學於東叡山。午後赤東海至梅亭。及川子興同到熊本藩邸野坂生宅。此日爲海鷗社文會都下及諸藩文學會者十餘輩。宿題太塔王論。余二人錄舊文一篇出之。大飲。及暮而散。海鷗社原栗山翁之所創而古賀穀堂今主盟。諸子強勸余二人使入社。因錄姓名鄉貫於姓名簿。「晴。晚陰雨。」

十八日 休常課。午後當直。夜書會讀。「午後高濱生到告歸期且乞余贈言及舊作。託紙篇而去。」「陰雨。」

十九日 午前當直。眞光寺書至以明日有事休講。午後講易於小柳津氏。弔下條氏之喪子。「晴暖。」

二十日 午前浴。午後出城結髮。「晴。午後快晴。」

二十一日 午後同赤東海初訪鍵屋半兵衛飲。岡田藩山崎生亦至。半兵衛。姓石田。名篤。字伯孝。號醒齋。業賈住金吹街。好學。都下書生多相知者。名藏書。「陰雨。」

二十二日 東叡山小學講。會讀孟子。〔風雨。〕

二十三日 常課。午後灸。御書到自太田氏。〔伯兄及姪。湯子復。〕
〔晴寒。〕

二十四日 爲訪加藤□□三。午後講易於小柳津氏。夜裁鄉書。〔寒雨。〕

二十五日 爲眞光寺。是日以大風雨不可行而止。今夕易說鈔畢。〔風雨。〕

二十六日 朝講易於眞光寺。午後當直。易講義。晚過太田氏託家書。夜諸子會讀孟子。〔晴。〕

二十七日 〔晴。晚雨。〕

二十八日 如例課。傳習錄休講。終日體不佳。晚出城小酌。過金花舖託石印。歸路結髮。〔陰。晚雨。〕

念九日 午後講易於小柳津氏。〔風雨。〕

三十日 朝到眞光寺讀易。〔頑陰。〕

三月朔 午後出城。先過石田醒齋謝前日之供惠。訪藤井生於

朝川氏。生返一方金。更訪東氏。又過話岡本翁傳加藤生之言。又訪詩佛翁。翁有微恙不面而出。過東臺山下酒肆小酌而入山觀花。花已爛漫。實爲莊觀。小憩慈眼堂。歸路訪高濱氏。敍別贈別詩及題舊作。便面藤紙皆同氏所託也。〔終欲霽未霽。〕

二日 夜孟子會讀。〔終日大雨□。〕

三日 朝着禮服伸賀。〔林祭酒。一齋先生夫妻。〕當直。晚同壯古尋花於愛宕山及增上寺桂柄池頭垂絲櫻。其佗垂絲櫻獨盛。其餘猶早五七日。今日毛利侯投書返余戰國策。因賜其封內所送之紙四百枚。〔陰雨。午後晴。〕

四日 午後將適小柳津氏同氏使人投書乞有事休講。光秀論起稿。夜適眞光寺爲讀八家文。對酌留宿。〔先有三宅公之話。眞光寺貽金一方。〕〔快晴。〕

五日 晨□□改竄光秀論。飯後講易。歸路浴結髮。過金花堂。午前歸塾。〔淡陰。〕

六日 先生致余國策於林公。午後易講。晚出城小酌。過話金花堂。今夕街風生以母疾急歸鄉。〔雨晚晴。〕

七日 午後適加藤生。歸路遊愛宕山及增上寺觀花。歸路訪高橋善次不在。浴而歸。夜諸子會讀孟子。〔晴。〕

八日 晨前田生來報喜事。常課。午後同川田西川阿部三生適志

毛藕塘之會於柳橋某樓。飲食席上遇鄉人宮羽卿及山田生某生。蓋三子欲遍歷遊東陸而先至江都也。前日之家信已按其事。三年而逢舊社余無可⁽¹⁾知也。又邂逅尾張畫師原麻谷山人。山人七年前滯于我鄉與余甚相親。其後西遊不知蹤蹟者久矣。而今日相逢此彼驚喜。今日實得二快事。歸路同三子至東叡山。落花摧落。處々僅有晚櫻。過西川導余及二子於不忍池上酒樓松坂店者供具頗豐。小飲歸。歸路訪前田生不在。面謝元迪者託生事。還到至神田橋外。雨大至。跣而入塾。此日與張藩士相面者數人。尾藩山本半丘老人及良藏等也。〔陰晚雨。〕

九日 午後講易於小柳津氏。講後小酌而出。結髮於吳服橋外。訪羽卿僑居又酌。閑話數刻而歸。〔羽卿達西園及伯氏姪書。〕〔雨。午後晴。〕

十日 朝至眞光寺。午後受命代田口生赴萬八樓之會。與草野生同。席上雜踏不堪。久坐小酌而出。取途於淺草寺中至吉原觀花。過端場渡曆遊墨沱堤上遍看花。花正開實爲奇絕。歸路小飲兩國橋下。入塾爲薄暮。〔淡陰。午後快晴。〕

十一日 夜諸子會讀孟子。大岡生來敘別貽詩二篇。〔陰。自午。前晴。〕

十二日 高濱子寄書披□□。貽雁皮紙。木雞寄書約以明日適飛鳥山。晚同川田市村復遊墨水看夜花。小酌淺草寺門前而往。初更歸塾。浴。〔頑陰。〕

十三日 雨。故止飛鳥之遊。覺感微邪。終日臥起不常。〔雨□々。〕

十四日 午後講易於小柳津氏。歸路結髮。訪木雞小酌而歸。〔此日□鯖。〕〔大雨。〕

十五日 過木雞同買艇遊墨沱。飲食乎大七。歸舟過北里。夜至眞光寺讀文小酌投宿。〔陰。午後漸晴。〕

十六日 朝讀易而歸。午後易講釋。〔未濟。〕當直。夜諸子會讀孟子。〔陰。〕

十七日 午後海鷗社會。赤井氏。歸路到本多氏話而歸。〔陰寒時雨。〕

十八日 朝如例。午後休。午前出城結髮。訪木雞欲託家書〔西岡。家兄。珠文。華崖。書及忠硯遺物。印一顆。〕於小島生皆不在。因託之逆旅小婢而還過金花堂約買遜志齋文粹。〔今日已後校國策異本六種皆寫本學藏書。林公所賜借貸也。〕〔陰寒。〕

十九日 午後適小柳津氏。〔翳。〕

二十日 朝適眞光寺。〔陰雨。〕

二十一日 朝訪木雞同散步兩國橋飲食。歸路遊淺草街而還。〔淡陰。〕

二十二日 朝講「易於東叡山。歸路浴。當直。夜諸子會讀孟子。」〔濃人田邊生入寮。〕〔陰。午前雨。〕

二十三日 〔雨。〕

二十四日 午後講「易於小柳津氏。同山田生飲酒。赴金花堂□□小學。〔陰。晚雨。〕

二十五日 朝到「眞光寺」。午後訪「赤井氏」不遇。過「飲本多氏」。歸路至「淀侯邸中内田某家」託「復鳴門」書。又訪「木雞僑居」不在。山内小島「生供飲。余不能再飲三爵而已。歸塾正未「初更。〔陰。〕

二十六日 午前木雞來告「歸期」。午後易。〔「乾象辭。」晚本多玄圭來亦告「歸期。〔欲「晴未「晴。〕

二十七日 晚訪「木雞」小酌。過「采蘋」□分韻。歸路過「金花堂。〔風雨。〕

二十八日 如^①例。當直。〔陰時雨。〕

二十九日 午後出^②城結髮。訪「木雞」不遇。與「二生」少候辭去。適「小柳津氏」。歸路訪「服大夫。大夫微恙不面。玉井生侍話喫「晚飯。過「芦野子」謝「來訪。又過「話本多氏」小酌而歸。〔陰微欲霽。〕

四月朔 朝講「於眞光寺」。又過「本多氏」取「雨傘。〔陰。午前將晴。晚又雨點。〕

二日 朝過「木雞僑居」。又訪「藤井生」。訪「詩佛」以「病臥不面。路託「余書」貽「一方金」託「取得」而去。訪「華亭翁」而話。所請之書□□攜歸。訪「前田生」不遇留書而歸。〔陰晴不定。〕

三日 常課。午後感「風邪」平臥。〔時風邪大行。〕〔陰晴不定。〕

四日 平臥。羽田氏調藥。服「柴桂加羌活葛根。〔大雨。〕

五日 以「病辭」眞光寺。〔雨。〕

六日 午後易。〔快晴。〕

七日 病稍快。長戶生入塾。〔陰。時雨。〕

八日 先生易爲「休會」。病頗快。猶未「止藥□。〔終日大風雨。〕

九日 快甚。午後講「易於小柳津氏」。會後同至「某店」酌酒。夜歸。〔午後大晴。〕

十日 朝講「易於眞光寺」。歸路過「金花堂」。午後冠出來訪「先生。余辯論。〔晴。〕

十一日 午後到「霞關邸」託「家書」不遇。夜諸子會讀孟子。「晴。」

十二日 朝講「小學於東叡」。「此日訪「佐吉」不遇。遺言而去。訪「詩佛」託書。河田生所託也。又過朝川。訪「藤井生」。生返室。歸路小酌江戶橋□店。町野生書至。報言「其子某以去年四月病疾」没。某嘗從「遊余」。當直。「朝霽。又雨。」

十三日 午前國策校畢。奉還諸本於林公。淺野氏之使早川瀨平來「江都」。深町及姪友和之書達自「太田孫平」。早川生之所「齎」也。夕直作「答書」。又別作「書寄「正平」送致所「寄託」之石印皆合爲一封。將以「夕訪」早川於赤坂。以「風雨」止。晚東氏急以「書請」余。余與「使發」。夜到「東氏」聞「□去無狀之事」。憤恚不可堪。小酌。「晚晴。」

十四日 晨赴「東氏」債「金三銀」猶議「事」。歸路過「本多氏」議「事」。午後小酌歸。午後講「易於小柳津氏」。晚到「赤坂」訪「早川瀨平」不在。面「上田氏」之使樋口某。託「復書於早川之僕」而歸。夜爲「梅陂子移宅」故供「蕎麥於諸子」。「晴。」

十五日 朝課「業眞光寺」。歸路過「金花堂」。「晴。」

十六日 過「話東氏」。歸路訪「服太夫」。又訪「本多氏」託「書寄「淀府」。「鳴門。姑氏。」報「□□之事」。光藤父子及町野玄肅書到。夕赴「某生之泊」遊「堺町演劇場」。夜歸。歸路同過「某店」大飲。初更後歸塾。「晴。」

十七日 午後同「羽生」到「日影町」買「衣二單」。訪「梅坡子」賀「新婚移居」。歸路拜「神祝安國殿於三緣山」。過「鍛冶町」喫「鰻鱺飯」而歸。「晴。」

十八日 如「例」。午後先生招「余於愛日樓」。余告「歸期」。先生細儀「身事」。「雨。」

十九日 午後出「城結髮浴」。過「小柳津氏」不在。歸則已投「牘請」休講。余以「早出」不知也。夜諸子會讀孟子。「午前晴。」

二十日 朝適「眞光寺」。午後適「小柳津氏」。當直。「淡陰。」

二十一日 夜諸子會讀孟子。「陰。午後晴。」

二十二日 朝同「先生」適「東叡山」。歸路過「面岩松玄迪及東氏」。午後灸。芦野生來。「晴。」

二十三日 課業如「例」。「晴。」

二十四日 午後結髮浴。課「業於小柳津氏」。「晴。」

二十五日 夜到「眞光寺」讀「韓文」。飲酒。因投宿。「晴。晚小雨。」

二十六日 朝讀「易」。歸路過「話金花堂」。浴「鍛冶橋外」。「晴。」

二十七日 當直。「晴。」

二十八日 常課。稻津生來訪因約⁽¹⁾王子之行。晚出城結髮。歸路過⁽²⁾下條氏辭明日講。〔晴。〕

二十九日 晨同田邊生出城。過⁽¹⁾目白不動及護國寺。又過訪柳灣翁。途遇雨買油傘著鞋而進。過⁽³⁾瀧川辨才天女祠到⁽⁴⁾金輪寺。會稻津生。午後小飲。未牌同拜寺過梅花亭大飲。歸路過飛鳥山日暮里道灌山而歸。街風生書到。永井姪湯子亭書到。夜把燭裁復書。〔雨。〕

五月朔 朝往眞光寺。歸過日本橋北大坂屋託復書。〔夜孟子會讀。〕〔朝陰。午前晴。〕

二日 午後適小柳津氏講易。歸路過⁽¹⁾話石田誠齋喫晚餐而歸。〔晴。〕

三日 曉到小柳津氏喫飯。同遊⁽¹⁾總國府臺蹟詣⁽²⁾羅漢寺眞間弘法寺小幡中山等。歸到⁽⁴⁾行德買舟而還。二更方下。〔府里見氏故墟有寺曰總寧寺。距江都五里。同遊者小柳津氏及須笠川田二子⁽¹⁾藩士一僕與余共五人。〕〔陰。午前晴。〕

四日 午後出城結髮浴。講易於小柳津氏。〔淡陰。時晴。〕

五日 朝着禮服拜祭酒及先生及內君。午前本多氏來訪。午後訪赤井及服部芦野三氏不遇。過飲本多氏。〔陰。晚雨。〕

六日 當直。午後易。〔彖傳。〕夜孟子。〔陰。〕

七日 午後同渡邊華山本多伯懋訪⁽²⁾慊堂翁於羽澤隱居。飲話數刻。入夜歸。〔此日午飲本多氏。華山。田原侯臣。善畫好讀書。〕〔晴。〕

八日 朝出城結髮浴。常課。夕到古山君宅執謁致⁽¹⁾子亨之託。歸路到霞關訪賴餘一留話。及夜喫晚餐。初更歸家。此日聞⁽³⁾星野醫人及門人良徵來在櫻田邸。以入夜不能訪。〔晴。〕

九日 午後講易於小柳津氏。〔晴。〕

十日 朝適眞光寺。〔有謝〕午後到櫻田邸訪⁽¹⁾星野氏不遇。訪賴子。〔晴。〕

十一日 朝到太田氏託家書。又過⁽¹⁾星野氏面主人及良徵話小刻。攜良徵遊愛宕山增上寺淺草寺東叡山神田明神。〔晚飯鍛冶場外。午飯神明祠前及小飲。夜孟子會。〕〔晴。〕

十二日 晨適東叡山。〔小學講畢。〕歸路過⁽¹⁾話華亭翁結髮。午後同⁽²⁾齋子出城買蚊帳。歸路微飲。〔服太夫來敘別。余不遇。〕〔陰。午後雨。〕

十三日 常課。夜訪金花堂。殊文書到。〔雨。午後晴。〕

十四日 當直。⁽¹⁾冠山⁽²⁾老公來⁽³⁾愛日樓。召余索說國策定本⁽⁴⁾。即呈覽。公賞譽。過甚。謂好國華。先生改竄余賀⁽⁵⁾。賴翁⁽⁶⁾序。午後講⁽⁷⁾易於小柳津氏。〔晴風。〕

十五日 〔雨。〕

十六日 朝適⁽¹⁾眞光寺。歸路浴結髮。午後易講⁽²⁾。〔彖。〕夜孟子會讀。〔晴。〕

十七日 朝到⁽¹⁾東叡山⁽²⁾。開講孟子。午後討⁽³⁾澤三郎服太夫⁽⁴⁾。野生⁽⁵⁾。飲食。〔陰。〕

十八日 常課。午後海鷗社會。過⁽¹⁾昌谷子宅。〔雨霽不常。〕

十九日 朝過⁽¹⁾賴承緒⁽²⁾。報明日到⁽³⁾原氏⁽⁴⁾之約⁽⁵⁾。承緒諾。午後過⁽⁶⁾小柳津氏⁽⁷⁾。講易。六十四卦以⁽⁸⁾今日⁽⁹⁾卒業。午後主人供⁽¹⁰⁾酒飯。〔晴。〕

二十日 朝適⁽¹⁾眞光寺。午後同⁽²⁾賴承緒⁽³⁾訪⁽⁴⁾川北氏⁽⁵⁾。話。西脇昌谷服部諸子來會。〔陰霽不定。時雨點。〕

二十一日 田邊生以⁽¹⁾親病⁽²⁾遽歸鄉。午後爲⁽³⁾先生⁽⁴⁾使⁽⁵⁾於安積良齋⁽⁶⁾。留話供⁽⁷⁾菜果。關研次亦在。夜孟子會讀。〔淡陰。〕

二十二日 昨夕服太夫贈⁽¹⁾魚二尾及鹽豉。余忽卒未⁽²⁾復書⁽³⁾。以故朝到⁽⁴⁾服氏⁽⁵⁾謝之。且貽⁽⁶⁾先生書⁽⁷⁾二葉。晚同⁽⁸⁾市山⁽⁹⁾二生⁽¹⁰⁾出⁽¹¹⁾城浴。過⁽¹²⁾金花堂⁽¹³⁾。歸路小酌。當直。〔終日大風揚沙。風甚溫尤不可人。〕

二十三日 如⁽¹⁾例。〔晴暑。〕

二十四日 午後質疑。〔傳習錄。〕過⁽¹⁾小柳津氏⁽²⁾。講⁽³⁾易繫辭。〔晴。〕

二十五日 朝適⁽¹⁾眞光寺。〔陰。時雨點。〕

二十六日 午後易講。〔午前赤東海同⁽¹⁾大久保子⁽²⁾到。余爲介面⁽³⁾先生。大久保初謁也。〕夜孟子卒⁽⁴⁾業。〔同昨。〕

二十七日 朝適⁽¹⁾東叡山⁽²⁾。路過⁽³⁾岡本氏⁽⁴⁾達⁽⁵⁾先生書幅⁽⁶⁾不⁽⁷⁾面而去。歸路金花買⁽⁸⁾紙筆。〔陰晴不定。〕

二十八日 課如⁽¹⁾例。

二十九日 當直。午後出⁽¹⁾城浴結髮。過⁽²⁾小柳氏⁽³⁾。講⁽⁴⁾繫辭。諸子請⁽⁵⁾以⁽⁶⁾余歸期在⁽⁷⁾近增⁽⁸⁾講日⁽⁹⁾。歸路到⁽¹⁰⁾石田醒齋⁽¹¹⁾。貽⁽¹²⁾所⁽¹³⁾託壽序亦近著詩文稿。晚食而歸。〔雨。〕

六月朔 朝講⁽¹⁾易於眞光寺。會後按摩飲酒喫⁽²⁾午飯⁽³⁾而歸。夜爲⁽⁴⁾諸子⁽⁵⁾講⁽⁶⁾中庸。〔雨。〕

二日 夕適⁽¹⁾今治侯邸⁽²⁾。侯未⁽³⁾到。過⁽⁴⁾服部氏⁽⁵⁾。託⁽⁶⁾贈⁽⁷⁾光藤子⁽⁸⁾之書⁽⁹⁾。〔晴。〕

三日 常課「晴。」

四日 午後出「城結髮。過「金花堂。過「慊堂翁」及渡「過華山。講「易下條氏。」「陰。」

五日 朝適「眞光寺。晚同「市村山田」出「城小飲。」「寸陰寸晴。」

六日 午後常課。伯氏友和姪湯子亨三氏書達「自太田氏」聞「淀府姑氏之訃。夜到「金花堂」以「藏本五部」謝「主人。」「金花有「贈致」書籍於講文之便。故託「之生」達「於鄉。」「翳。時雨點。」

七日 當直。夕講「易於小柳津氏。」「晴。」

八日⁽¹⁾ 常課。午後適「今治侯邸」訪「矢嶋大夫及玉井生二子」從「侯駕」新來。服太夫之歸在「近。因敘」別且喫「晚餐。與「玉井生」話。近藤誠輔寄「書。光藤禎心寄「詩。皆託「鈴木氏。」「淡晴。」

九日 午後過「金花堂。歸路浴。講「易於小柳津氏。」「陰晴不定。」

十日 朝適「眞光寺」講「中庸。」「開講。」裁「家書。」「伯氏。湯華崖珠文。」「晴。」

十一日 午後訪「星埜氏」不「遇。過「賴承諸。託「家書於太田氏。須笠黑田二子來訪。玉井生來訪。」「陰晴不定。」

十二日 午後結髮。講易於小柳津氏。夜暑甚步「街上。」「晴。」

十三日 先生微恙休「常課。伯茂達「淀府書信」見「報「幼女死。」「鳴門及從姊之復書見「報「姑氏訃。」「雨。」

十四日 當直。午後適「小柳津氏。」「陰熱。」

十五日 朝晴。伯茂。飲酒喫「午飯。借「堯峯集及接鮮紀事草」歸。」「夜同「□□」過「話關克精。」「晴。」

十六日 朝適「眞光寺。午後赴「醒齋。石田氏壽筵供具頗豐。會者十餘人。」「水府立原甚太郎。丸龜加藤優二。□□□人。同藩小川入馬。堤鴻佐。大久保七之助。開寶□之介。赤井嚴三。安積祐輔。上田恪之助。清水太郎。牧□左衛門。□條□衛門。外三四人不知名。」「易休講。永井□之來。」「晴熱。」

十七日 朝適「東叡山。歸路觀「不忍池。過「□□□。過「東氏及岩松元迪。晚赴「池端高田侯邸中大久保宅文會。題贈余歸省序。」「晴。」

十八日 常課。朝過「梅披翁」問「安否。歸路過「荻生惣右衛門「觀「徠先生之遺物。夕肥後藩書生塚原生來話。同赴「其公邸「面「辛島翁「貽服及摺扇二柄。歸路過「野坂生。」「晴熱。」

十九日 醒寄「余有竹居集。藤條生之書達自「先生。午後出「城結髮。過「金舖「買「紙。過「小柳津氏」講「易。歸路訪「醒齋「謝「前日之宴。訪「下條生吳服街宅「飲酒。西鄉生來會。夜浴。同「西鄉過「某店喫飯。」「晴酷。晚驟雨將「來而不「來熱。熱甚。」

二十日 朝過「眞光寺」。講後命「侍人」按摩。飲酒喫「午飯」。晚裁「家書」。「姪友和。深町氏。」「淡晴熱甚。晚驟雨大至。迅雷鳴□涼亂生。」

二十一日 當直。玉井生來報「寓昌平學之事」。「陰。過涼。」

二十二日 朝灸。午後結髮。講「易於小柳津氏」。「午前下條生來。」「快晴。」

二十三日 常課。晚訪「鈴木太夫」不遇。到「眞光寺」。觀「佃島烽火」。遂投宿。寄「書於同塾」報「先生」。秋元醫人亦至。「晴。」

二十四日 朝課。業而還。夕講「易於小柳津氏」。繫辭卒「業」。「晴」

二十五日 晚出「城結髮」。「晴。」

二十六日 午後易。晚到「太田氏」託「家書」。「古山氏書。友和之復書。」歸路訪「承緒」小酌歸。「晴熱。難寢。」

二十七日 朝訪「華亭翁」請「贈言及書」留話歸。夕講「易於小柳津氏」。「同昨。熱更甚。」

二十八日 常課。夕訪「澤熊山安積良齋」不面而去。初訪「古賀洞庵子」。又訪「玉井生於麓澤堂」。訪「塚原生於依田氏塾」而話。同過「酒肆」。生進「余別酌」。當直。「晴熱。」

二十九日 午後講「中庸於小柳津氏」。夜同「諸子」出「城納涼」。再小

酌街肆。「同昨。」

三十日 此日立秋。朝講「中庸於小柳津氏」。晚訪「鈴木大夫」。藩士某來會飲酒。讀「論語首章」。「町野生書詩達自「荻野氏。」」「晴熱。晚微雨。」

七月朔 朝過「赤井士巽」返「所」評著書「留話」。又訪「本多氏」留飲。夜出「城結髮喰「灸鰻鱺」。又過「金花堂」買「紙」。晚石醒齋來訪。余偶不在。「陰。午後晴。」

二日 午後到「小柳津氏」。講以「今日」而息。同至「下條生吳服街之新居」。飲酒敘別。歸路再同「小柳津西鄉下條生」過「鰻鱺店」飯。晚訪「石醒齋」請「壽序淨寫」且「貽金」。「晴。」

三日 夜訪「赤井士巽」贈「警余錄序」。又訪「本多氏」假「禮服」而歸。「晴。陰。」

四日 朝訪「卷弘齋」。午後訪「麻谷畫史於市谷僑居」。麻谷貽「自畫扇」別畫「墨水花景於斷縑」請「貽「珠文」。歸路訪「渡邊華山」不遇。又過「太田氏」告「歸期」且託「公事」。更訪「賴承緒」。承緒臥病就談於枕頭。晚飯而去。又訪「星野氏」。夜初更歸塾。川北盤溪來贈送。又余不在。「陰涼。」

五日 當直。午後麻谷來。同出「城小酌」。過「金花堂」。到「石田氏」

投「淨寫壽序」而去。「陰。」

六日 晚到「眞光寺」講「中庸」畢小酌喫飯。「晴涼。」

七日 佳節。禮服伸「祭酒及師家於祝詞。晚到「愛宕山」。歸路買「油衣」小酌喫「飯街店」。同「山田大埜」。「同」昨。」

八日 朝過「澤氏」。塚原玉井玉置前嶋岡本定松東氏等敘別。又過「石田生」。午後又過「野坂氏」。夕安積思順來請以下「十一夕」到「其家」上。常課。「陰。夜雨。」

九日 朝訪「昌谷川北」二氏。過「眞光寺」講「中庸」。午後過「牧野生」不遇。過「芹野玉井」二子。過「鈴大夫」敘別。小酌喫飯。「晴。」

十日 朝過「辛嶋氏」取「草稿」。又過「松本侯邸」。過「金花堂」。夕過「梅陂」不遇。贈「酒一斗」。「陰晴。」

十一日 晨同「小柳津諸子」過「不忍池」觀「蓮花」。花未「老興頗多」。又自「駒形」買「舟過」二州橋某店。又舟而到「某街」而歸戾舟於「江戶橋」別「諸子」赴「安積思順之約」。夜四更前歸塾。「晴。」

十二日 朝到「眞光寺」講說。歸路過「卷致遠」。致遠爲「余逮」數錢。供「午飯」。未牌歸塾。「松本藩諸子貽」謝金「二匁及贖」二方金。「晴。」

十三日 朝過「梅披子」小酌。夜過到「本多氏」小酌。「晴。」

十四日 當直。夜出「城結髮」。食「炙鰻魚」一酌。「朝微雨。午前晴。」

十五日 午後同「壯吉」過「飲小笠原氏」。晚微雨。「陰涼甚。」

十六日 朝出「城買」帶。歸路過「醒齋」議「鱸沢行」午飯。又過「小柳津氏署」。夕本多氏餞飲冒「風雨」往。赤井士巽亦至遂宿焉。「終日大風雨。」

十七日 朝來與「主人」論「禮」。午前歸。海鷗社會。夕赴「野坂氏」。辛嶋翁「子亦至」。酌後賦「詩」。今日主人「析原生」。「終日大風雨。」

十八日 朝到「岡本先生及東氏岩松生」。又過「朝川」。與「秀氏」飲「兩國橋下」。午後鈴太夫來敘別。請以下「二十日」再講「書」。夜到「眞光寺」酌「別酒」因宿焉。「陰。」

十九日 朝歸。武機捷錄卒業。晚出「城買」諸土產。「歸在「念五日」」。太田氏達「家信」。「伯氏。姪及湯氏。」因回書言獲「發程日」既而又得「書約」再愆期。「陰時晴。」

二十日 午前出「城」。午後過「鈴太夫」先訪「伯懋」謝「贈言」。直到「太夫寓」因講「中庸首章於「侯之館」。諸有司皆坐聽。侯有「病不」臨席「別」席竊聽焉。講後復過「太夫寓」。有「供具」。有司「三上」芦野傳法池田及藩諸子再來謝。夜謁「櫻宇公」。「晴。」

二十一日 午後赤井士巽設「餞宴」。塾諸生亦有「贈詩」。各與「別杯」。本多伯茂齋藤劍客來會。晚辭去。醉甚。過「本多氏」喫「茶飯」話而還。「晴。」

二十二日 午後同「羽田生」出「城買物酌」。晚又同「梅坡」出「城別飲」。

石田醒齋藤井順介來敍別。賴承緒亦以「書敍別」。皆不遇。夜供「鯖於同塾」。

二十三日 松本藩諸子來辭。午前出「城」。午飯按摩。歸路過「小柳津氏」。晚諸子來會。夜再出「城過」金花堂。

*

*

*

讀我書樓長曆 卷三

癸巳六月十九日 或雨或輟涼甚。終日在「天神街之居」。夜歸。午後

古和生還自「嚴島」。廢「直館」。

「文集三十九。答「許順之」書。」朱子曰。心一也。操而存則義理明而謂「之道心」。舍而亡則物欲肆而謂「之人心」。「亡不」是無。只是走出逐「物去了」。自「人心」而收回便是道心。自「道心」而放出便是人心。頃刻之間恍惚萬狀。所謂出入無時莫「知其鄉」也。

「晉按。人心道心之說比「章句序」差覺「簡直」。故存「之」。

二十日 雨涼。結髮。讀「歐文精華錄等」。數日來體頗不「佳」。

二十一日 翳。草「文一篇」。課「諸生治「園蕪」。宿「南街居」。「修書送「佐藤槐荒鳴門及油屋生」託「奎曄閣」。

二十二日 立秋。午後晴。進講。臨「法書檢篆誦「漁洋詩」。「連日課業大抵如此。客秋已後專「攻文章」其他則或講「誦經史」或改「

舊稿等「不可」一定。後不「必一々記」之。「做詩。宿「南街」。

二十三日 晴暑。「文集四十。答何「叔京」。」朱曰。心之體用始終雖有「真妄邪正之分」其實莫「非」神明不測之妙。雖「皆神明不測之妙」而其真妄邪正又不「可」不分耳。「按是即工夫即本體本體即工夫之意」。

「又。」隨時云者。正謂或危或孫。無不「可」隨之時耳。若曰當視時之「可」隨與否。則非「聖人所謂隨時」矣。

二十四日 晴。淨念寺雛僧法尔終日在「塾讀書」。尔後每日如此。

官長小池氏招至傳「命」。示「近世叢語四卷」即攜還。「叢語岡藩儒角田大可著。有「齋先生賴山陽「家敍」。」中元在「近見湯子享「乞」借「官錢二萬五千」。夜舉家訪「伯氏」遂宿「南街」。

二十五日 晴涼。結髮。居業如「課」。夜訪「戶田久野二氏」。內人二女到。

二十六日 陰風時雨。灼「艾背肩」。

「孟子公孫丑。」性。按。性也者理而已矣。方「其未」發也固未「可」標「其目」。已發而見「於事」。其大綱不過「於仁義禮智四者」。「餘姚意蓋如此」。

「四德。四端。」仁義禮智皆表德之名也。四端亦表德而言。四德之究竟者也。端字爲「端本」爲「端緒」俱可「通」。孟子既論「道體」竝列「四德」爲「見於事」之大綱。又言「四端」以要「其究竟」不「憚」反覆重言「似」喻「諸道」。意猶「謂理之存乎人者曰「性」。性即天理。有「善而無」惡。故凡事從「理爲「善反」之爲「惡。事無「一不「理而善之名不「可」勝數」矣。然其大目則爲「四德。四德之

爲「萬善」其究竟則四端而已。故仁之屬多矣而究竟不過「惻隱」義之屬多矣而究竟不過「羞惡」。禮之辭讓智之是非亦如此。蓋欲使「人切實體驗而知道之所在」也。

〔孟子萬章〕怨慕。按。怨字與「怨念怨惡之怨」不同。論語可「以怨及後章小弁之怨義同。共哀恨痛迫之意。怨慕二字俱屬「父母」爲「是是長息之所」以疑也。高云非「汝之所」知。蓋謂「不知」愈疏之爲「不孝」也。恕字即愈疏義。夫且怨且慕不能爲「心者」孝子之眞情生於愛「親之至爾。高可謂能知「舜之心」者上矣。故孟子舉「其言」以釋之。至「若」內則所謂疾怨及勞而怨者「徑認至親爲「仇讐」者而固爲「大不孝」。文公意以爲聖人不當「怨」父母「故爲「自怨而慕」父母說牽強不通。「齋子既改「其說」而尙似「調停回護擺脫不盡何歟。〔我獨力耕「田以下言「怨意。〔理氣〕按「理無「形氣有「形性也。未發也由「氣而推「本。其所以然故理氣一物體用本末等難容於言。

〔性善〕按「凡發「於事「燦然得「其理」而左右前後無所「乖戾」謂「之善。不得「其理」者謂「之惡。夫天人一理。唯天無「形故其變化得「自然之叙」人爲「形之所累故亦爲「惡。雖然良知良能其本善。可見爲「乃變而爲「惡者皆氣質之弊。孟子性善之說蓋如此。

〔惡亦性〕按「理氣爲一物則氣質亦性。故惡亦不可不謂「性。〔程伯子意益如此。〕夜訪「觀牛師遂宿「南街。

二十七日 未晴。晚涼甚。結髮。講「小學於館。修「吾老人來話。採「花而去。做「五古詩十二韻。

二十八日 陰晴不定。時雨。〔仁心〕虛靈主「宰一身者謂「之心。而貫「未發已發」而知覺順理生々不息無「一息間斷」是則心之本

體謂「之仁」矣。即天地物之心一。所謂元也。此仁一字兼「義禮智三者。孟子云仁人也。又云仁人也。心皆此意。如「常人氣稟拘「之物欲蔽「之知覺失「理乃雖「能知覺而復非「其本體。不得「謂之人。然是理不「終滅息雖「不仁之甚而四端之心觸「事而生焉。人能即「此而擴「充之致「知之積遂可復「於其本體。學問之能「事蓋是也已。

〔動靜〕心之動靜就「事而言「之耳。若論「知覺之體則固貫「動靜運而不「已者。動亦定。靜亦定。以「理言之。動亦動。靜亦動。以「知覺生々言之。

二十九日 天色猶昨。晚至「南街。遂投宿。

七月朔 猶昨。午後雷。草「文一篇。將「有所之以雨止。結髮。〔精華錄卷八〕海外眞看大九州。青天一髮是琉球。人間奇觀君知否。萬里滄溟萬斛船。〔題乘風破浪圖。原四首錄「一。〕〔按。邦人言「船大小必曰「幾斛。依「此詩則彼亦云。蓋言「其所容也。〕

二日 快晴。〔文集四十二。答「胡廣仲。〕朱云。性善之善不「與惡對。此本龜山所將「聞於浮屠常揔者。宛轉說來似「亦無病。然謂「性之爲「善未「有「惡之可「對則可。謂「終無「對則不可。蓋性「而已。既曰「無「有「不善則此性之中無「復有「惡與「善爲「對亦不「待「言而可知矣。若乃善之所「以得名是乃對「惡而言。其曰「性善是乃所以別「天理於人欲也。天理人欲雖「非同時並有之物然自「其先後公私邪正之反而言之。亦不「得

不爲對也。

三日 晴。做詩一篇。晚到南街見幼女病遂宿。〔昨關大夫使人報今秋東役之命。〕

四日 陰晴不定。時雨。〔同卷。答石子重。〕朱曰。慎獨須貫動靜。做功夫上始得。

〔又。〕明道曰。動容貌周旋中禮暴慢斯遠。正顏色則不妄斯近。信矣。出辭氣正由中出斯遠。鄙倍。此動容貌正顏色。出辭氣皆不著力是成德之事。斯遠暴慢斯近。信遠鄙倍。猶云下便遠暴慢便近。信便遠鄙倍。自然如此也。伊川曰。辭氣之出不使至於鄙倍。卻是就遠字上用工。上蔡云。動也正也。出也君子自牧處。又曰。緊要在上三字。說不同如何。〔問目。〕熹詳此意。當以明道之說爲正。上蔡之說尤有病矣。〔答。〕

夜家人到。

五日 晴。〔篆字彙。〕己□□□□音紀。身也。對彼而言也。

己□音以。止也。畢也。猶了也。語終辭。己□□□□音似。

辰名。辯從曰字彙分三字。而旁從止分己巳二字。且疑爲一字也。

關大夫贈紅魚。夜招家人與飲。

六日 晴。進講舜典。夜灼艾。

七日 佳節。晴。進謁。拜節於關大夫及親戚知故家。

八日 晴。到小池氏返上近世叢語。

〔四十三。答林擇之。〕朱云。三代正朔。以元祀十有二月考之。則商人但以建丑之月爲歲首而不改月號。〔時亦必不改也。〕以孟子七八月十一月十二月之說考之。則周人以建子之月爲正月而不改時。〔改月者後世之彌文。不改時者天時不可改。故祭祀田獵猶以夏時爲正。〕以書一月戊午厥四月哉生明之類考之。則古史例不書時。以程子假天時以立義之云考之。則是夫子作春秋時特加此四字以繫年見行夏時之意。若如胡傳之說。則是周亦未嘗改月。而孔子特以夏正建寅之月爲歲首。月下所書之事。卻是周正建子月事。自是之後月與事常相差兩月。恐聖人制作之意不如是之紛更煩擾。其所制作亦不如是之錯亂無章也。愚見如此。而考之劉質夫說。亦先書春王正月。而後書二百四十二年之事。皆天理也。似亦以春字爲夫子所加。〔王字亦非史策舊文。〕但魯史本謂之春秋。則又似元有此字。而杜元凱左傳後序載汲冢竹書。乃晉國之史。卻以夏正建寅之月爲歲首。則又似胡氏之說可爲據。此間無竹書。煩爲見拙齋扣之。或有此書。借錄一兩年示及幸甚幸甚。又漢書元年冬十月。注家以爲武帝改用夏時之後。史官追正其事。亦未知是否。此亦更煩子細詢考也。

〔同上。〕又云。蓋天命之性者天理之全體也。率性之道者人性之當然也。未發之中以全體而言也。時中之中以當然而言也。要皆指本體而言。若呂氏直以率性爲循性而行。則宜乎其以中爲道之所由出也失之矣。

夜珠文來話。家人到。

九日 晴。結髮。午後自南街報小女病往看之。遂宿。

十日 晴。終日在「南街」。夜歸塾。岡生寄書。

十一日 晴。中元。紛忙以今日「徹」帳至「十六日」。午後至「南街」遂訪「觀牛師」。家人來。

十二日 晴。臨「邸講」。「湯子」歸路訪「關氏孃子病」。「時患痘」。借「官錢」二萬五千。

「精華錄卷十」手搦疎花寫硬黃。「帳世南遊官紀聞。響搗謂以紙覆其上就「明窗牖間」映「光寫」之。」

「又」試燈風裏見唐花。「田汝成西湖志餘。凡花之早放者名曰「」。唐亦作「堂」。

家人到修「俗事」。

十三日 晴。近日秋炎如「焚」。珠文貽「香魚」。頗多「塵事」。夜到「展」王父母之墓。家人到。

十四日 晴。「四十四」答「方伯謨」。朱云。隨「時變易以從」道主「卦爻」而言。然天理人事皆在「其中」。今且以「乾卦潛見飛躍」觀「之其流行而至」此者易也其定理之當然者道也。故明道亦曰。其體則謂「之易」其理則謂「之道」。而伊川又謂。變易而後合「道易字與「道字」不「相似」也。又云。人隨「時變易爲」何。爲「从」道也。此皆可「以見」其意矣。易中無「一卦一爻不」具「此理」所以「沿」流而可「以求」其源也。會以「理之所」聚而言。通以「事之所」宜而言。其實一也。

「又」不義而富且貴。所謂富貴非「指」天位天職而言。但言「勢位奉養之盛」耳。此等物若以「義而得則聖人隨」其所「遇若隨」固

有「之無」鄙厭之心焉。但以「不義」而得則不「以易」吾飯蔬飲水之樂「耳」。「按。此說與「集注」異而卻覺「有味」。因錄之。」

「又」答「梁文叔」。鬼神龜魄精氣體等之說頗詳。以「文長」故不「具錄」。

夜與「家人」展墓。

十五日 晴。賀「中元於親故」。家人到送至「南街」遂宿。

十六日 陰兩涼。終日在「南街」。午前訪「觀牛」圍棋供「齋飯」。齒痛。

夜宿。

十七日 同昨。太涼。午後快晴。古和生患「瘡」歸寓「西福院」療治。

二女來。珠文來話。「改」詩稿「乞」正。」

十八日 陰翳。珠文寄「詩」。

「四十五」答「丘子野」。朱曰。示喻觀玩之別。想已有「成說」。慈因「下問之及」嘗竊思「之敢布」左右。蓋易有「象」「八卦六爻」。然後有「辭」。卦爻之辭。筮有「變」「老陰老陽」。然後有「占」。變爻之辭。象之變也在「理而未」形「於事」者也。辭則各因「象而指」其吉凶。占則又因「吾之所」值之辭「而決焉」。其示「人也益以詳矣」。故君子居而學「易則既觀」象矣。又玩「辭以考」其所「處之當否」。動而諷「筮則既觀」變矣。又玩「占以考」其所「值之吉凶」。善而吉者則行。否而凶者則止。是以動靜之間舉無「違」理而自「天祐」之吉無「不利」也。蓋觀者一見而決。玩者反覆而不「舍」之辭也。

「又」答「胡寬夫」。大低自家所「看文字及提」督學生「工夫皆須觀」立「下一」定格目。格目之內常切存「心格目之外不」要「妄想」。「如

看「論語」今日看到此段，即專心致意只看此段。後段雖好且未要「看」。直待此段「分曉說得反覆不」差，仍且盡日玩味。明日卻看「後段」。日用凡事皆如此，以「類推」之可見。不然雖是好事，亦名「妄想」。此主一之漸也。若不如此，方寸之間頃刻之際，千頭萬緒卒然便要「主一」，如何按伏得下。

〔又〕^③。答吳德夫。「易之爲義，乃指流行變易之體而言。此體生生元無間斷，但其間一動一靜相爲始終耳。程子曰：上天之載，無聲無臭。其體別謂之易，其理則謂之道，其用則謂之神。正謂此也。此體在人，則心是已。其理則所謂性，其用則所謂情。其動靜則所謂未發已發之時也。此其爲天人之分，雖殊然靜而此理已具，動而此用實行，則其爲易一也。若其所具之理所行之用合而言之，則是易之有太極者。昨來南軒嘗謂：太極所以明動靜之蘊，蓋得之矣。」

夜訪「珠文」借「拙堂文話」。「伊勢齊藤有終著。」

十九日 或晴或翳。時雨點。和答「珠文」詩。家人到送至「南街」遂宿焉。

〔文話〕^①明氏中葉最推「王新建」救戴銑，忤「劉瑾」不恤，謫杖。吾見其氣節也。能使「京軍懷柔不」犯，以沮「許泰張忠」之計。吾見其智畧也。破「定南」中數十年之寇，平「宸濠」於旬月。吾見其用兵之神也。傳習臆說諸書，雖不免後人之議，要亦一家見解。

吾見其學問之深也。其餘騎射之微，筆札之小，無一不曉焉。文章雅健，爲「一代」大宗。稱爲「朱明」一代人物，誰謂不可。

〔又〕^②「茅鹿門」評「王新建」之文，謂「王文成公論學及記學諸文，程朱所欲爲而不」能者。江西辭爵及撫「田州」等疏。唐陸宣公宋李忠定公所「不」逮也。卽如「涖頭桶岡軍功等疏」一條，次兵情如「指諸掌」。嗟乎公固百世殊絕人物。後世品文者當自有「定議」。

云。斯言信矣。

〔又〕^③「山田」祠官正住隼人家，藏「陽明」送「日東」正使了庵和尚歸國序一幅。餘嘗往觀之。字畫隱秀，神采奕奕，其爲「親筆」無疑也。其文暢達本集所逸。故全錄之。曰：世之惡「奔競」而厭「煩拏」者，多遯而之「釋焉」。爲「釋」有道，不曰「清乎」，「澹而不濁」。不曰「潔乎」，「狎而不染」。故必息慮以「澹」，塵獨行以「離」。偶斯爲「不」詭於其道也。苟不如是，則雖「皓其髮」，「緇其衣」，「梵其書」，亦逃「租繇」而已耳。樂「縱誕」而已耳。其於道如何耶。今所「二字」可疑。恐有「脫誤」。日本正使堆雲桂梧，字了庵者，年踰「上壽」，不「倦」爲學。領彼國王之命，來「貢珍」於大明。舟抵「鄞江」之游，寓「館」於「馮」豫。嘗過焉，見其法容潔修，律行堅鞏。坐「一室」，左「右經書」，鉛朱自陶。皆楚楚可觀，愛非「清然」乎。與之辯，空則出所謂預修「諸殿院」之文論，教異同，以並「吾聖人」。遂性閑情，安不「譁」以肆「非」淨然乎。且來得「名山水」而游，賢士大夫而從，靡曼之色不「接」于目，淫注之聲不「入」于耳，而奇邪之行不「作」於身。故其心日益清，志日益淨。偶不「期」離而自異塵，不「待」浣而已絕矣。茲有「歸志」，吾國與之文字交者，若「太宰公」及諸縉紳輩，皆文儒之擇也。咸惜其去，各爲「詩章」以艷「飾」，迫躅。固非「貸而濫者」。吾安得「不」序。款曰：皇明正德八年歲在「癸酉」五月既望，餘姚王守仁書。印一。曰：伯安曰王守仁。按伊藤東厓蓋簪錄云：堆雲五山禪侶，名桂梧，字了庵。嘗充「使者」入明，有「行程記」。邂逅「近王陽明」。陽明作「序贈」之。東厓書「了庵事」如此。然唯曰「五山」不「詳」爲「某寺」住侶。伴蒿蹊開田耕筆爲「東福寺僧」。異日當「更詳」之。

二十日 晴。結髮。晚驟雨雷。夜詣「久野氏」，議「改稱」，遂宿「南街」。

二十一日 暴雨震電。午稍霽。命工浚井及修井幹。宿南街。

二十二日 向晴。「又。」宋潛溪論文賦詩簡子充并寄胡教授仲申曰。當其操觚欲鼓勇牧視返聽探元精。游魚中鉤曳深沚鉅獸投奔離叢坳。斯須朝崖變夕谷。惚恍西海爲東陵。精神所至萬物攝橐籥亭毒縱復橫。眞醇魯邦見郢鼎冲雅高辛陳五鼓。渾圓牘應振逸響。縉麗鵲雀梳文鋤。嚴森五刑布秋肅。華潤百卉含春榮。勁如韓彭將貔虎。仰揭斗柄麾麾槍。艷如長楊較羽獵。蒙盾負羽驅鸞旌。高排霽漢跨箕尾。呼噏沉瀣遊太清。未幾直墜九淵底。察之無蹟聞無聲。幽入陰宮作鬼語。祕怪詭詭難爲聽。劃然大明赤於火。景曜所鑠流爲瓊。似茲妙幹迭化軸。可以小枝相識評。

「又。」陳言謂陳腐熟套人々能言者非謂古言也。歐陽公曰。

凡作文發意第一番來者陳言也。掃去不可用。第二番來者正位語也。停之亦不可盡用。第三番來者精意也。方可用之。韓文公所謂惟陳言之務去憂々乎其難哉。其法如此。黃宗義曰。陳玄者每一題必有庸人思路共集之處。纏繞筆端。剝去一層方有至理可言。猶如玉在璞中。擊開頑璞方見玉。不可認璞爲玉也。不知者求之字句之間。則必如曹成王碑。乃謂之去陳言。豈文從字順者爲昌黎之所不能去乎。此說得之。

午後訪賴承緒留酌。又訪吉澤翁及松口老人某々家。文進來達小松生書。「六月六日及七夕所發」余不面。

二十三日 晴涼。柴媼來借一千錢。夜珠文來爲課業。「易。」結髮。

二十四日 晴。讀項羽紀。改定舊文。「近日將下擇數篇」乞正於

一齊先生上故。家人來調湯麵小飲。會廣澤生寄書杏庵問安否。「久不來故也。」

二十五日 晴。史記高祖紀。秦王子嬰。素車白馬。係頸以組。封皇帝璽符節。正義曰。按天子有六璽。皆以武都紫泥封。青布素白素。兩端無縫。三秦記云。紫泥水在今成州。輿地志云。漢封詔璽用紫泥。則此水之泥也。「按。說封義未瑩。須忝檢他書。」

家人到。珠文來。

二十六日 翳。時雨。結髮。作寄都築子言書。女苦腹痛宿南街堯夕看護。

二十七日 雨。四月九日淺野大夫失火爲主家鄰邸風惡將延燒。諸臣僕隸盡力防之。終無事。今日賜羹酒賞其勞。宿南街。

二十八日 晴。進講。結髮。賣人吉田氏之女余妻之從妹筭賣人某氏之子。今夕招飲赴某氏。先詣吉田氏同往禮成而還。宿南街。

二十九日 或晴或雨。夜詣伯氏候安否。還納提燈遂至南街辯事而歸。

三十日 翳。午後詣某氏謝拜燕飲。歸路訪賀藤氏問母病。

八月朔 開晴。賀佳節。曝圖書及衣服。晚訪西福院。主不遇。宿南街小酌。

二日 晴。曉來微雨。做詩一篇。

三日 晴。昨今輕寒。結髮。正田氏叔孀及山田祝官到。夕過鈴木氏及永井氏。夜詣賀藤正田二氏及南街。做詩一篇。街正死。昨今休授業。

四日 雨。訪伯氏疾。詣觀牛庵小酌圍棋。遂宿南街。

五日 晴。古和生歸塾。詣久野氏。珠文來受業。

六日 淡陰。「集四十七」文公答呂子約問。程子知周乎万物而道濟天下。故不過。程子曰。義之所包知也。文意曰。程子說易字。皆為易之書而言。故其說如此。但鄙意似覺未安。蓋易與天地準。故能彌綸天地之道。此固指書而言。自仰觀俯察以下。須是人始得。蓋聖人因易之書而窮理盡性之事也。近讀此書。方見得一端緒。非面論不能。既也。

「又。」又答學即行也。所謂所以學者。將以行之也。意必有在之。問曰。中庸言博學。又言篤行。則學與行自是兩事。「按。文公立言病處。最在是。子約云々其說卻覺切用。」

午後拉廣澤生詣落合氏。期觀月之會。歸路自莊山之麓。到己斐村。日猶高。更到古江村。訪為廣生小酌而還。過南街浴。初更歸塾。結髮。

七日 如昨。「又。」阡陌二字。熹前說而未是。當如風俗通。

後說乃為得之。蓋阡之為言千也。陌之為言百也。遂人徑是百畝之界。涂是百夫之界。而二者皆從即所謂南北之陌。畛是千畝之界。道是千夫之界。而二者皆橫即所謂東西之阡。蓋二字名義本以夫畝之數得之。決是井田舊制所本有。若曰秦始為之。則決裂二字。牽強說合。費盡氣力。而無文理。且井田既有徑畛之制。而秦人去之。則又何必更取東西南北之正。以為阡陌。然後可以靜生民之業。而一其俗上哉。此細事不足辯。或恐有。助於古今事變之學耳。

久野氏貽小紅魚。招家人小飲。古和生退塾。

八日 晴。做詩二篇。夜弟家四子來賞月命酌。

九日 淡陰。結髮。病酒。午後詣南街。觀牛及古和生到。以他出不面。夜古和生再來。

十日 陰。午前訪關大夫及久野氏。赤馬關人弘廬峯來面。訪賀藤生小酌。遂赴久野氏之約。講古本大學。臨席者四人。講後命酌。

十一日 陰。詣南街及觀牛庵。午後理園。二女來。晚小酌。大佐貽香魚三尾。

十二日 一晴一陰。通雨。結髮。次女來。觀牛庵集。杏翁諸子到。此夜江都人藤堂純山者來。宿南街。做詩一篇。小酌。

十三日 雨。午前歇。今晨有與_下珠文諸子_上遊_二小赤壁_一之約。余有故辭_レ約。井上生入門。

十四日 晴。披襟樓集。余拉_二公輝_一先到。諸子繼至。此夕佳魚。做_二詩_一一篇。諸子亦各有_レ作。醉甚。歸塾幾_二五更_一。「一分韻。一步杏翁小酌。」

十五日 晴。詣_二鈴木久野_一二家。此夕有_二郊遊之約_一而_二女發_一腹痛。痛劇不_レ可_二須臾旌離_一。故令_二珠文公輝_一先發。晚痛止即被_レ酒而行。別爲_二廣氏_一二子待。余同_二叔石_一二小舟_一同到_二猪口_一小亭。賞_二月小酌_一。五更歸。余遂宿_二南街_一。昨來清光近歲所未_レ遇也。

十六日 晴。改_二十四夕及昨夜詩_一。家人來。

十七日 晴。再訪_二加藤生_一。

十八日 微雨。聖善忌辰。晨起展墓詣_二伯氏家_一拜_二神主_一。心齋自_二十六日_一到_二今日_一。晚訪_二宮羽卿於嗽玉園_一小酌分韻賦詩。羽卿近日讀書_二於此_一。

十九日 或雨或歇。午後赴_二吉田氏之宴_一。五更客散。遂宿_二南街_一。

二十日 陰翳。進講。詣_二關大夫_一。井文進來。豐前醫生渡邊某來面。因請_二入門_一。爲廣生投書貽_二松萱_一。次女來腹痛發到_レ晚而止。攜至_二南街_一遂宿。

二十一日 翳。午後雨。訪_二珠文_一。齒痛在_レ蓐。

〔四十八。答_二子約_一。〕夫未發已發子思之言已自明白。程子數條引_二

寂然感通_一者皆與_二子思本指_一符合更相發明。但答_二呂與叔之問_一。偶有_下凡言_上心者皆指_二已發_一一言之失_上而隨即自謂_レ未_レ當亦無_レ可_レ疑。至_二遺書中纔思即是已發一句_一則又能發_二明子思言外之意_一。蓋言不_レ待_二喜怒哀樂之發_一俱有_レ所_レ思即爲_二已發_一。此意已極精微_一說到未發界至十分盡頭。不_レ復可_二以有_一加矣。

〔又。〕若_二氣配_一道義則孟子之意不_レ過_二曰_一此氣能配_二道義_一若無_二此氣_一則其體有_レ不_レ充而餒然_上耳。此實主向背條理分合畧無_レ可_レ疑。

〔又。〕蓋無_レ所_レ不_レ戒謹_一者通_二乎已發未發_一而言。而謹_二其獨_一則專爲_二已發_一而設耳。

二十二日 陰雨。結髮。夜同_二家人_一詣_二伯氏_一致_二奠具_一。〔明後二十四日皇祖妣二十五年忌辰。〕小酌歸。

二十三日 翳。午後詣_二伯氏_一招_二僧誦_一經因飲食。歸路過_二加藤生_一。

二十四日 霽。朝展墓聽_二讀經_一。久野七郎宅講_二大學_一。爲廣生來。

二十五日 晴。結髮。加藤氏_二子誘_一余遊_二五日市村某氏_一。午前發。八鼓後而到。〔二里。〕老夫婦先在焉。晚汎_二舟於海面_一觀_二漁_一。遂宿焉。

二十六日 雨。終日不_レ出。飲_二酒食_一肉而已。七鼓因辭歸。

二十七日 晴。午前訪_二藤生病_一且話。五日市行。晚又至。老婦已先還。因_レ約_二古江行_一。作_二書報_一知爲廣生以_二九月朔_一爲_レ期。詣_二觀

牛庵「棋」。遂詣「南街」小酌寢。

二十八日 陰。午後晴。次女來灸。歸後大發「腹痛」。晚至「南街」看病終夕。贈「書於都築子言」。今夕小野生招飲。

二十九日 晴。終日在「南街」看病。後宿焉。廢直。

九月朔 霽。同「加藤氏」家人「遊爲廣氏採「松茸」。結髮。

二日 晴。詣「加藤生」謝「昨遊」。女未「快宿」南街。

三日 晴。詣「久野氏」議「山田落合」二子之託。

「文集四十九。答「王子合」。」問。孟子言「性善」一章。伊川先生謂「性之本」又謂「極」本窮「源之性」。明道先生則謂人生而靜以上不容「說」纔說「性」時便已不是「性」。凡人說「性」只是說「繼」之者善也。伊川以爲「本而明道言」其繼「何也」。竊思云々。⁽²⁾朱云。周子所謂「無極而大極非」謂「太極之上別有「無極」也。但言「太極非」有「物耳」。如「云」上天之載無聲無臭。故下文云「無極之眞」二五之精。既言「無極」則不「復別舉」太極也。若如「今說」則此處豈不「缺一太極字」耶。人生而靜。靜者固是「性」。然只有「生字」便帶「著氣質」了。但生字已上又不「容」說。盖此道理未「有形見處」故今纔說「性」便須「帶著氣質」無「能懸空說得性者」。繼「之者善」。本是說「造化發育之功」。明道此處卻是就「人性發用處」說。⁽⁴⁾孟子所謂乃若其情則可「以爲」善之類是也。伊川所言「極」本窮「源之

性乃是對「氣質之性」而言。言「其氣質」雖「善惡不」同然「極」本窮「源而論」之則性未「嘗不」善也。

「又。」問。八卦之位如何。朱云。康節說。伏羲八卦乾位本在「南坤位本在「北文王重」易時更定「此位」。其說甚長。大槩近於附會穿鑿。故不「曾深留意」。然說卦所說卦位竟亦不「能」使「人曉然」且當「闕」之。不「必強通」也。

夜訪「鈴木氏」小酌。

四日 晴。結髮。遣「杜詩偶評三冊」及示「詩稿於鈴木氏」。⁽²⁾前日信濃

山行假名記及圖亦示「同氏」。女腹痛。六月以來託「中村三純」療之「不」癒。今日攜「之詣」寺田松藏「會」診之「且乞」藥而還。長女來報「女胸痛」即往視「之已而止」。適「觀牛房及加藤生」。

五日 晴。自「前夜」風猶未「止」。女之病發即至「南街」。痛止。歸路過「加藤生」。女痛再度。又詣「南街」終夕不「寐」。

六日 晴。晨詣「寺田氏」乞「藥」。終日在「南街」。大杉九兵來辭。「近日役「江戶」。」不「面」。

七日 晴。晨自「南街」還。以「痛止」也。藤圭「來」。詣「正田氏」議「家計」小酌。宿「南街」。「感」微邪「服」葛根湯。

八日 雨。午前晴。午前自「南街」還。宿「南街」。小酌。廢直。

九日 佳節。晴。結髮。上「公邸」執謁。詣「關太夫家及伯氏南街」。午後廣澤生訪「爲廣生」。做「詩一篇」。「限韻」。「晚訪」藤生。女胸背痛詣「南街」終夕看護。

十日 晴。午前自「南街」還。未牌再往。夜赴「金丸氏之約」。久野氏不能「至休會」。小酌。宿「南街」。

十一日 晴。金丸氏來訪。封「江都諸家之書」。「佐藤先生文稿及儀物。安積思順文稿書讀。」「若山儀物。川田上桮詩稿。本多伯茂林藤七。五首。」過「話藤生」。

十二日 晴。結髮。詣「大杉氏」託「江都書」。侍聽「館講」。

「文集五十。答「恭叔」。朱云。心理不可「以彼己分」。以「理爲」事可也。循「物無」違非。謂「循物之理」。但言「此物則循」於此物之實「而無」所「違則是所謂信耳」。

夜家人到。小酌。留宿。

十三日 晴。午後同「家人」理「園中」。夜小酌。送「家人」到「南街」遂宿焉。

十四日 晴。結髮。與「公輝」午飯。加藤生還。見「大岡子栗書牘」。此人聞「在」某逆旅「訪」余以「不在」留書而去。余拉「公輝」同訪「逆旅」敘「別情」同詣「嗽玉園」。與「木雞兄弟」話。歸路訪「坂井子實」不在。即同歸塾。留「子栗」而宿焉。子栗近「江人」。久在「昌平學」爲「齋長」。余遊「江都」日俱訂交。子栗以「辛卯歲」西遊。今屬「歸途」。「子栗報「佐賀侯招命之事」」。

十五日 晴。「廢直」。關大夫役「江都」晨往送「之」。歸與「子栗」話贈「答詩」。午飯後子栗過「賴承緒」。令「公輝」從「余訪「南街」。浴。往「賴氏」坂子實亦至。夜及「戌牌」而還。子栗宿「逆旅」。余再詣「南

街」而宿焉。與「子栗」辭訣。

十六日 晴。子栗晨發。公輝送「之」。余不能「面」。午後覺「微恙」發熱。

「精華錄」。青詞「李肇翰林志。凡太清宮道觀薦告詞文用「青藤紙」書「朱字」謂「之青詞」」。

十七日 晴。結髮。恙未「快」。久野氏到。爲廣生至「乞」正「詩草」。訪「久野氏」飲食。訪「鈴木氏」不遇。觀牛師至不「面」。詣「深丁氏」報「密事」。宿「南街」。「朝至「關氏及深丁氏」。夜訪「藤生」。生今夜「□□行」。

十八日 晴。午後陰翳。「都子言復書到」。訪「鈴木氏」不遇。西街社祭屬「今日」。夜過「飲伯氏」。家人亦詣「伯氏」因宿焉。

十九日 雨。午後歇。敘別「鈴木氏」。與「公輝」同「午飯」。伯氏且飲。「鈴木氏役「三原」從「內子」也」。又過「伯氏」迎「家人」而還宿「南街」。

二十日 猶陰。午後雨。過「謝伯氏」。內子赴「三原」始謁「老內子」也。詣「有司」奉賀以故止「館直」。

二十一日 未「晴」。午後微霽。結髮。做「文」。夜訪「觀牛師」棋。宿「南街」。

二十二日 晴。詣「寺田氏」報「女病狀」。過「藤氏」。漢書異姓諸侯王表。嚮應「于謗議」。顏師古曰。嚮音響。響應者如「響之應」聲。按「

易繫辭「其受命也。如嚮蓋古嚮響以同音相通。」

二十三日 晴。明日長姉忌辰故晨展墓。過南街。灸。夜家人來請公輝爲內人灸。劉向封事云。君子獨處守正不撓衆枉勉強以從王事則反見憎毒讒怨。故其詩曰。密勿從事。不敢告勞。無罪無辜。讒口瞽瞍。按。密勿今作毘勉。蓋同義。」

二十四日 晴。過永井氏拜伯姊神主。講大學於金丸氏。講後命酌。藤生報鄰邸之事即還過藤生再適金氏。

二十五日 晴。晨謝鄰邸主人不在以故未聞消息。詣藤生話其事飯而歸。

〔集五十一〕董叔重問。程先生論中庸鳶飛魚躍處曰。與必有事焉而勿正也之意同活潑潑地。銖詳先生舊說。蓋謂程子所引必有事焉與活潑潑地兩語皆是指其實體而形容其流行發見無所滯礙倚着之意。〔其曰必者非有人以必之。曰勿者非有人以勿之者。蓋謂有主張是者而實未嘗有所爲耳。〕今說則謂必有事焉而勿正心者乃指此心之存主處。活潑潑地云者。方是形容天理流行無所滯礙之妙。蓋以下道之體用流行發見雖無間息然在人而見諸日用者初不外乎此心故必此心之存然後方見得其全體呈露妙用顯行活潑潑地畧無滯礙耳。所謂必有事而勿正心者若有所事而不爲所累云尔。此存主之要法。蓋必是如此方得見此理流行無礙耳。銖見得此說似無可疑而朋友間多主舊說。蓋以程子文義觀之。其曰與曰同而又以活潑潑地四字爲注云則若此兩句皆是形容道體之語。然舊說誠不若

今說之實。舊說讀之不精未免使人眩瞶迷惑。學者能實用力於今說則於道之體用流行當自有見。然又恐非程子當日之本意。伏乞明賜垂誨。

朱云。舊說固好。似涉安俳。今說若見得破則即此須臾之頃此體使已洞然不待說盡下句矣。可更猛著精彩稍似遲慢便蹉過也。

〔同。〕宗子有公子之宗。有大宗。有小宗。國家之衆子不繼世者若其間有適子則衆兄弟宗之爲大宗。若皆庶子則兄弟宗其長者爲小宗。此所謂公子之宗者也。別子即是此衆子既沒之後其適長者各自繼此別子。即是大宗。直下相傳百世不遷。別子之衆子既沒之後其適長子又宗宗之即爲繼禰之小宗。每一易世高祖廟毀則同此廟者是爲祖免之親不復相宗矣。所謂五世而遷也。

夜適南街宿焉。吉田生招飲。

二十六日 晴時翳。終日至南街。夜伯氏舉家及姪友和吉田氏等來飲。予設社酒也。又宿。古和生之兄貽□□。

二十七日 陰。午後晴。晨歸鄰邸之事拜披藤生。

劉向封事云。枉矢夜光。〔應劭曰。流星也。其射如矢。蘇林曰。有聲爲天狗無聲爲枉矢也。〕

〔漢書。〕叔孫通傳。大行設九賓臚句傳。〔蘇林曰。上傳語告下爲臚。下告上爲句也。〕

晚過南街戒約內人。過話藤氏贈葛粉囊。大坂小松生書達自□□□。

二十八日 陰晴不定。寒甚。明日屬鄉社。晚詣南街小酌。廣

生亦到。余留宿。伯氏之二女亦來宿。

二十九日 晴。在南街廣生來午飯。飯後同拉女兒輩詣白神社。與廣生別而詣觀牛庵棋。又過藤生飲食。夜歸塾。吉田郡吉書達自廣生託生之事。

三十日 晴。進講。報郡吉書託廣生。藤氏使人報珠文之歸。做詩一篇。

十月朔 雨。詣關大夫及三有司。歸路過話藤生。午飯且飲而還。〔文集五十一。答黃子耕。〕率性之謂道。非是有此性而能率之乃謂之道。但說自然之理循將去即是道耳。道與性字其實無甚異。但性字是渾然全體。道字便有條理分別之殊耳。修道之謂教。乃是聖人修此道以教於天下。如禮樂刑政之類是也。諸說多端。然細考程先生說其要不過如此。其間亦有說得不相似處恐是當時論亦未定也。

二日 晴。

三日 雨。谷永論神怪書云。夫周秦之末。三五之隆。已嘗專意散財。厚爵祿。竦精神。舉天下以求之矣。〔按。三五之隆。義未詳。或是皇帝之義歟。〕

四日 晴時雨。結髮。

〔又。〕萬正淳問云。集注曰。仁者心之德愛之理也。其言之不何耶。蓋仁有偏言者。有專言者。專言者心之德也。程子西銘之意是也。偏言者愛之理也。愛之所施則親親仁民愛物是也。朱子答云。固是如此。然心之德即愛之理非二物也。但所從言之異耳。〔夜珠文來語。〕

五日 晴。夜做文一篇。〔下岐蘇川記。〕

六日 陰風寒。夜過話藤生小酌。

七日 晴。大阪河喜之僕來過話大鹽氏之事。做詩一篇。〔小□。〕

八日 晴寒。微恙。廢直。午後訪珠文在鯉溪同圭。夜歸宿南街。

九日 晴。廢直。

十日 晴。〔文五十二。答吳伯豐。〕伯豐問。孟子集解序說引史記列傳以爲孟子之書孟子自作。韓子曰。軻之書非自著。先生謂二說不同。同史記近是。而滕文公首章「道性善處。」注則曰。門人不能盡記其詞。又於第四章「決汝漢處。」注曰。記者之誤。不知如何。朱曰。前說是。後兩處失之。熟讀七篇觀其筆勢如鎔鑄而成非綴緝所就也。論語便是記錄綴緝所爲非一筆文字矣。

〔又。〕問。梁惠王下第三章。伊氏曰。仁者之心至公也。智者之心用謀也。以小事大則狹隘而私一國。必大謂二者所遇不同而應之皆出於理之所當然。其規模固有廣狹然其智者

私於一國則非畏天之旨矣。仁智之辯當別有說。答。仁者自然合理智者知理之當然而敬以循之。其大概是如此。若細分之則大王句踐意思自不同也。

〔又〕問。二十七章。仁之實。義之實。有子以孝弟爲仁之本。孟子以事親爲仁事兄爲義。何。蓋孔門論仁舉體以該用。卽所謂專言之仁也。孟子言仁必以其配。卽所謂偏言之者也。事親主乎愛而已。義則愛之宣者也。推其事親者以事其長而得其宣則仁之道行焉。答。此說是。〔按。專言偏言似不與集注同而亦有理。故錄存之。〕

山田祝官來。夜加藤生招飲。與公輝同往。

十一日 晴淡。朝訪珠文於鯉村。午後公輝亦到。〔途次過南街及伯氏過話西園翁。〕

十二日 晴。過南街及正田氏。今日頗覺疲勞。午後公輝再詣鯉村。藤生及爲廣生來。次女感風邪。宿南街。

十三日 陰夜雨。邸講。余以足痛不臨席。昨今偏體頗痛。夜應吉田氏之招飲食。〔報恩講。〕歸路過話藤生。

十四日 晴淡。〔漢唐舊說。詩。大序子夏。小序孔子。子夏毛公合作。書小序孔子。〕〔又一說孔子作。見朱子文集五十五答熊夢兆書中。〕湯子亨返言志錄。爲廣叔石講詩。詣朝陽館。十三經。歸路過友和姪宅小酌。夜月色佳。拉公輝訪珠文僑居小酌。

十五日 陰翳。夜至南街。小酌遂宿。

十六日 陰暖不定。朝出塾過伯氏。道訪珠文於鯉村。夜歸。夜腹痛。

十七日 晴。講大學於久野氏。結髮。

十八日 晴。〔五十二。答伯豐。〕明道曰。蓋生之謂性。人生而靜以上不容說。纔說性時便已不是性也。凡人說性只是說繼之者善也。孟子說人性善是也。伊川曰。若乃孟子之言善者乃極本窮源之性。

答。以上不容說者是指天命本體對其稟賦在人者而言。極本窮源者是就人所稟之正理對氣質之性爲說。此云繼之者善亦與通書所指不同。乃孟子所謂乃若其情可以爲善之意。四端之正是也。

伯氏會書過飲。家人自昨夜已在。歸路過觀牛房棋。

十九日 陰。內子自三原至賀於有司。爲之休館中課業。贈香魚子及書於浪華書賈某。油久生淀府荒井三家別發一書復小松生。夜飲伯氏迎家人歸南街遂宿。

二十日 陰。湯子亨之三原。做文一篇。〔贈浪華大鹽氏書。〕有命侍讀側室。〔以子亨往三原也。〕

二十一日 晴。外弟有事終日在南街。夜過藤生。

二十二日 晴。直後侍講側室。晚至南街議昨事遂宿。

二十三日 晴。侍講如「昨」。適「鈴木氏」。

二十四日 晴。

二十五日 陰。午後雨。夜輕雷。西山眞氏曰。按「漢制度曰。帝之下書有」四。「一曰策書。二曰制書。三曰詔書。四曰誡敕。策書者編簡也。其制長二尺。短者半」之。「篆書起」年月日「稱」皇帝以命「諸侯王」。三公以「罪免亦賜」策。以「隸書」用尺一木兩行惟此爲「異也」。制書者帝者制度之命。其文曰制詔三公。皆璽封尙書令印重封露「布州縣」也。詔書者詔告也。其文曰告「某官」云如「故事」。誡敕者謂「敕」刺史太守。其文曰有「詔敕」某官。他皆放「此」。

漢書儒林王式傳。博士江公心嫉「王式」謂「鼓吹諸生」曰。歌「驪駒」。服虔曰。逸詩篇名。見「大載禮」。其詞云。驪駒在門。僕夫具存。驪駒在路。僕夫整駕。

南街招「飲伯氏」予與「公輝」俱至。歸路過「藤生」「公輝」先還。

二十六日 晴。「朱子語類八十。」或問「詩」。曰。詩幾年埋沒被「某」取得出來做「公門」看得「恁地搭滯」。看十年仍「舊死」了那一部「詩」。今若有「會」讀「書底人」看「其詩傳」有「不」活絡「處」都塗了「方好」。而今詩傳只堪「減不」堪「添」。「胡泳」。

適「鈴木及久野氏」。歸後公輝以「易卒」業。煮「所」漁比目魚。買「酒對酌」。「公輝漁□□。」結髮。做「詩一篇」。

二十七日 陰。講「小學於館中」。家人寄「柳條綿袍」。

二十八日 □霽。侍講。結髮。為「公輝」講「啓蒙」自「今日」始。夜

過「飲伯氏」。

二十九日 晴。侍講。做「文一篇」。夜吉田翁招飲宿「南街」。正田生貽「細鱗」。

十一月朔 晴。過「關大夫及三有司」。歸路問「藤珠文候」。午後對話。向「夕而還」。「生患「痔疾」旬余。」

二日 凍雨。侍講。

三日 陰晴不定。時霰飛雨點。侍講。過「話金丸氏」小酌。

四日 晴。侍講。有「公事」。詣「書肆」。歸路過「南街」。晚飯問「珠文病」。

五日 陰晴不定。侍講。聞「關太夫在江都」賜「增秩」。往賀贈「一尊酒」爲「儀」。晚過飲「關氏」。歸路訪「永井生及藤生」至「南街」。公輝亦來小酌遂宿。

六日 陰。朝過「寺田氏」。評「史伯夷傳」。

七日 陰晴不定。侍講。夜訪「珠文病」稍復貽「藥資」。過「久野氏」。「金丸爲「久七□□。」

八日 晨微雪。後晴。侍講。

〔五十三〕答「胡季隨」。蓋爲「將」此敬字「別作」一物「而又以」一心「守」之故有「此病」。若知「敬字只是自心自省當體便是」則自無「此病」矣。

〔又〕。洒落兩字本是黃大史語。後來延平先生拈出亦是且要「學者識」箇深造自得底氣象「以自考」其所「得之淺深」。不「謂」不「一再傳」而其弊乃至「於此」。此古之聖賢所以只教「人於」下學處「用力」至「於此等」則未「之嘗言」也。〔顏曾以上都無「此等語」。子思孟子以下乃頗有「之亦有」所「不得」已也。〕

亡友山口清介七年忌辰爲「明日」。乃昆西園翁招「舊友」話「舊」。余亦與「焉」。

九日 陰。曉「二軒邸失火」。余以「微恙」不能「赴」公館「以故廢直且休」侍講。賦「一絕詩」寄「西園翁」。晚同「公輝」展「清介及天香墓於傳福寺」。過「南街」唱「蘿菖根」。歸路過「話藤生」。

十日 陰。如「昨」。大阪小松生書達自「井上氏」至。〔文進自攜來且言「親迎之事」。〕

十一日 雨。寄「書大阪大鹽氏」。〔介「書買河喜」。〕託「奎曄閣」。自「夕過」話藤生。

十二日 陰。冬至。夜過「話藤氏」食「蘿菖」。侍講。

十三日 晴。午後陰。侍講。夜過「南街」。余沽「酒公輝買」魚同飲。遂宿。

十四日 雨。侍講。夜西園翁招飲。

十五日 晴。侍講。過「有司」。湯子亭自「三原」還。有事過「正田氏」及宮野某。又詣「南街」吉田氏議「事」。歸路過「話藤生」。生示「挂冠出嶽集」。做「冬至詩」一篇。家人製「新衾」余攜歸。

十六日 晴。灸「肩背」。過「珠文」返「挂冠集」。

十七日 晴。子亭已還。免「侍講」。

十八日 晴。夜雨。與「子亭」密議屬「吏推薦」。夜過「飲久野氏」且言「落合氏」。

十九日 未晴。午後赴「南街諸氏」議。問「弟之事」。又至「野間氏」議「吏事」。主人未「還」。更過「□□」小酌。醉後更詣「野間氏」相面。賀「文進」親迎。

二十日 陰晴不定。朝與「子亭」議「薦舉」。子亭未「容受忍憤」而別。買「比目魚」貽「文進氏」。

〔柳州與「楊誨之」第二書。〕故勤々云「尔而不」已也。〔又〕。其佗但用「莊氏國語文字」太多。反累「正氣」果能遺「此則大善矣」。

做「文」一篇。

二十一日 陰翳。時雨點。松本藩林子由西鄉伯斐及下條行藏書達自「太田氏」。夜過「話藤翁」。宿「南街」。

二十二日 晴。次女疾全復休藥。鈴木氏還_二杜詩偶評三及記行圖_一。過_二珠文_一。「做_二詩一篇_一」。

二十三日 晴。微恙不_レ能_レ上_レ直。啓蒙卒_レ業。

二十四日 晴。十餘日下血不_レ已。三數日殊甚。肢體輒緩頗覺_レ疲。因亦廢_二直館_一。「夜珠文招飲食_二赤牛肉_一。同_二公輝_一。」

二十五日 雨。浪華書賈河内氏寄_二大鹽氏洗心洞筭記_一。「做_二詩一篇_一」。

二十六日 晴濕。復_二書於西鄉林下條三子_一。又作_レ書寄_二若山川田及鳴門書賈河喜_一。文進來。米主人來。寺田松藏來。大澤來按摩。夜米家招飲。天滿街失火赴_二公邸_一。

二十七日 晴。講_二小學於館中_一。午飯南街。「公輝亦至。」做_二詩一篇_一。

二十八日 雨。有_レ病不_レ能_レ直。終日在_レ蓐。門生文哉來診投藥。夜廣澤生供_二酒□_一小酌。

二十九日 晴陰不定。疾未_二全癒_一猶在_レ蓐。夜家人來問_レ病。

三十日 晴。在_レ蓐。西園來訪不_レ面。珠文惠_二牛肉_一晚食_レ之。

十二月朔 晴。在_レ褥。寺田松藏來診勸_レ服_二歸脾湯_一。珠文來問。家

人來。小酌食_レ肉。「伯氏貽_二三原蘿菖根_一。」

二日 陰晴不定。微雪。在_レ褥。珠文贈_二梅花_一。報_レ之以_二水仙花_一。

三日 晴寒。在_レ褥。漸覺_レ快。買_二鳧肉_一。伯氏來問_レ病_一。止服藥。

四日 陰翳。在_レ褥。腫物膿之黏者盡潰瘡口若_二兒口_一。湯子享問_レ病。家人來議_二弟事_一。

五日 微雪。晴。在_レ褥。做_二詩四篇_一。吉田老人來。

六日 晴。在_レ褥。做_二詩一篇_一。服_二歸脾湯_一自_二今日_一始。夜珠文來訪問_レ病。贈_二養及丹釀_一小酌。

七日 晴。在_レ褥。寺田松藏來診。

八日 午微雨。稍快復。午後大坂書賈河内生寄_二急書_一即作_二復書_一托_二奎暉閣_一。過_二話藤珠文_一且訪_二乃翁_一。晚飯小酌。

九日 霽。病癒入_二覺舍_一。

十日 晴。午後訪_二西園翁_一不_レ遇。過_二伯氏_一小酌。又過_二正田氏_一。南街珠文。

十一日 陰。做_二文半篇_一。作_レ書寄_二珠文_一。

十二日 陰。過_二南街_一午飯。病後瘡口漸合始試浴。過_二永井氏_一賀_二

舉子貽二百錢。做文半篇。

十三日 晴。夜與公輝桑田生小酌。

十四日 陰。朝士靜姪至請余過其家。即詣伯氏。伯氏有喜賜余酒錢若干。小酌午飯而還。過南街及藤生。夜復詣伯氏贈大桶。大飲木原生。歸途買魚肉過南街分其半。廢直。

十五日 雨雪。午後霽。終日患宿醒。晚寺田翁來議心事。買餛飩供茶。

十六日 晴。館講代子亭。「直止今日。」過關大夫詣有司。午後同公輝到落合氏。主人不在。留書而去。小飲野店。探梅村中。過伯氏。夜同公輝過南街喫牡蠣飯。歸路過話藤生小酌。

十七日 晴。分贈梅花藤翁附以國歌。翁亦賦一首報焉。午後過南街議事。

十八日 陰。過南街議事。午飯又過話久野氏。

十九日 大雪。晚有事赴南街。歸路過藤翁小酌。

二十日 陰晴不定。時雨雪。夜赴南街。小酌遂宿。

二十一日 陰。歸路到藤生話寺田氏之託。
〔五十六。答鄭子上書。〕〔子謂韶章。〕朱云。美者其功也。善者

功之所由以立。即揖遜征伐是也。

〔又。〕「命者天之所賦予乎人物也云々。朱云。氣不可謂之性命。但性命因此而立耳。故論天地之性則專指理言論氣質之性則以理與氣雜而言之非以氣為性命也。」

二十二日 晴。永井正田氏有喜事攜次女先往永井氏酌賀酒。歸路獨過飲正田氏。為廣生贈老兔一隻。

二十三日 晴。永井姪有閱鹽之事朝往解之。有司奉命課諸寮十年間勤惰賜余賞錢三千。〔全歲四年余皆闕〕分兔肉於諸親故家。寺田松藏富樫琢磨來。過話伯氏小酌。

二十四日 陰。家君忌日在近。心齋始於余日。大鹽子起回音〔俗簡〕自河內書賣達寄示文稿。夜過珠文示大鹽子起之書。〔五十七。答陳安卿。〕陳文子乘馬十乘章。集注云々。朱云。陳文子以崔子弑君而去齊可也。它邦未有是事乃以為猶崔子而去之所謂不審輕重者此也。

二十五日 晴。〔又〕〔仁者先難章〕呂氏四句正是解此意「意恐章字。」四句。然不憚所難為一句似亦只說得先難意而後獲意思不切。如何。朱曰。當時本欲只用呂說後見其有此未備。故別下語。又惜其語非它說所及。故存之於後耳。

二十六日 晴。自側室賜紙二束。午後以家君忌晨展墓萬福寺。遂過伯氏拜神主。過南街及奎暉。夜飲南街。歸路過話藤翁再小酌。

二十七日 晴。立春。家人來小酌。過_二奎曄_一議論。

二十八日 晴。同_二家人_一過_二伯氏_一賀_二歲杪_一且飲。宿_二南街_一。數日來多_二俗務_一。

二十九日 晴。午後過_二關太夫家_一及話_二親故_一賀_二歲杪_一。夜家人來飲。

三十日 晴。午後材木街有_二火_一。與_二公輝_一馳至_二南街_一因訪語_二親故_一賀_二無恙_一。俗事既了。詣_二伯氏_一賀_二歲杪_一。過_二南街_一公輝亦來俱命_二小酌_一。同出_二街中_一買_二家私_一。

* * *

注(卷一)

天保二年正月三日

(1) 大學旁釋_二王陽明の『大学古本旁釈』を佐藤一斎が翻刻増補したもの。文政十二年(一八一九)序。『日本の陽明学(中)』(陽明学大系第九卷、明德出版社、一九七二)一五三頁を参照。

(2) 摘説_二一斎の『大学摘説』、『大学欄外書』とも呼ばれる。文政十二年(一八二九、一斎五十八歳)の序。既出『日本の陽明学(中)』一五二頁を参照。

(3) 祭酒公_二林述斎(一七六八—一八四一)、名は衡・乗衡、字は叔統・公鑑・徳詮。美濃岩村藩主松平乗蘊の三男。寛政五年(一七九三)林家を継いで大学頭(祭酒)となり昌平黌で教える。秋陽が述斎に入門したことについて、後の天保二年正月七日程に「午後入司成林公之門。一齋先生紹介。拜公於邸。」とあるのを参照。

(4) 金花堂_二江戸の書物問屋・紙問屋。

正月五日

(1) 奎曄閣_二加藤香園を指す。広島 of 書賈。名は淵、字は珠文、号は香園・王香主人・王香園など。米屋兵助と称す。長澤規矩也・長澤孝三『改訂増補漢文學者總覧』(二〇一一年、汲古書院。以降、凡例の略称に従い略記する。)一一七頁・一七一五番を参照。

正月六日

(1) 唐宋八家讀本_二清・沈徳潜撰『唐宋八家文讀本』のこと。乾隆年間の評点本、あるいは文化年間に翻刻された官版か。

正月七日

(1) 司成林公_二林述斎。天保二年正月三日条、また同注(3)参照。

正月八日

(1) 眞光寺_二本郷(現在の文京区本郷)の天台宗寺院。

正月十日

(1) 伯氏_二長兄の吉村和助(一七八九—一八三九)、名は董、通称和助。

正月十一日

(1) 言志録_二佐藤一斎の『言志録』。文政十三年(一八三〇、一斎五十九歳時)の刊。

(2) 服部大夫_二今治藩家老服部伊織を指すか。天保元年九月六日程「今治藩用人高濱宗右衛門來言其大夫服部伊織請見余之意」(『読我書樓長曆』翻刻

(二)「荒木龍太郎・関幹雄、『活水日文』62号、二〇二一年、活水学院日本文学会、六六頁。以降、凡例の略称に従い略記する。)を参照。

正月十二日

(1) 壯吉_二若山勿堂(一八〇二—一八六七)名は拯、字は用拯、号は勿堂、通称壯吉。阿波の人。佐藤一斎に学び、のち昌平黌の儒官となる。関山邦宏・橋本昭彦・高木靖文『「升堂記」(東京大学史料編纂所蔵)翻刻ならびに索引』(平成八年度文部省科学研究費補助金課題番号8851088「近世における教育交流に関する基礎的研究」第一次報告書。以降、凡例の略称に従

い略記する。)一一〇頁に翻刻された『升堂記』によれば、文政十一年(一八二八)九月二十六日の入門。

(2) 子興Ⅱ一斎の女婿であり門弟の河田迪斎(一八〇六—一八五九)のことか。名は興、字は猶興、迪斎は号、通称八之助。昌平饗の儒官となる。

(3) 中庸欄外書Ⅱ佐藤一斎の『中庸欄外書』。成立年不明。本条と次の十三日条から、このころ草稿が完成したと考えられる。既出『日本の陽明学(中)』一五四頁を参照。

正月十五日

(1) 湯子亭Ⅱ湯浅華崖(一七八一—一八三八)名は復、字は子亭、号は華崖、通称東左衛門。三原藩士。朝陽館で師弟を教えた。秋陽は文化十四年(一八一七、二十一歳時)に入門した。荒木龍太郎・荒木見悟『吉村秋陽・東沢瀉』(叢書・日本の思想家46、一九八二年、明德出版社。以降、凡例の略称に従い略記する。)一三頁参照。

正月十七日

(1) 梅阪Ⅱ佐藤英助のこと。号は梅坡。佐藤一斎の甥。横須賀藩儒。

(2) 墨沱江東梅莊Ⅱ現在の墨田区東向島に位置した向島百花園を指すか。

正月十九日

(1) 鳴門Ⅱ荒井鳴門(一七七五—一八五三)。名は公廉・豹、通称半蔵、号は鳴門・南山・豹庵・雙屈軒。林述斎に学ぶ。淀藩藩儒。『漢文學者總覽』二〇頁・二八三番を参照。『升堂記』(九八頁)文化十五年(一八一八)の記録に「入門四月十六日 口入平井直蔵 住和州五条御代官 辻甚太郎教諭所 懸り 荒井半蔵」とあるのを参照。

(2) 赤井厳三Ⅱ赤井東海。名は繩、字は士異、通称は秀之助、厳三・東海と号す。古賀精里に学ぶ。高松藩儒。既出『漢文學者總覽』九頁・一二四番を参照。「海鷗社文会照名録」(西村謙三編『古賀穀堂先生小伝』私家版、一九三五年、一三七頁所引)に名を連ねる。

正月二十三日

(1) 送矢野生序Ⅱ『讀我書樓文章』(九州大学附属図書館所蔵、吉村文庫1A 2、甲冊。以降、凡例の略称に従い略記する。)に、「送矢野千里帰省序」が収録されている。そこでは矢野千里を「北筑の人」と記している。すると、『升堂記』(一二二頁)天保二年(一八三一)の記録「入門正月二十六日。紹介佐藤捨藏。秋月諸生。矢野吉太郎。」とも合致する。

正月二十六日

(1) 「寫序文贈矢野生高濱氏書至」は欄外の墨筆による加筆。

(2) 高濱氏Ⅱ今治藩の用人高濱宗右衛門か。天保元年九月六日条(「翻刻」)(二六六頁)「今治藩用人高濱宗右衛門來言其大夫服部伊織請見余之意」を参照。

正月二十九日

(1) 「午後」より「揚沙」に至るまでは朱筆。

二月朔

(1) 「二月朔」朱筆。

(2) 梁詩禪Ⅱ梁川星巖(一七八九—一八五八)のこと。名は卯・孟緯、字は伯兔・公図、号は星巖、通称新十郎。

二月十日

(1) 芝口稻荷祠Ⅱ芝口は現在の新橋周辺を指す。稻荷祠とは日比谷神社のことか。鯖稻荷とも呼ばれた。

二月十一日

(1) 詩佛老人Ⅱ大窪詩仏(一七六七—一八四九)、名は行、字は天民、号は詩仏老人。常陸の人。山本北山・市河寛齋門下。折衷学者・詩人。既出『漢文學者總覽』九一頁・一三三五番を参照。

(2) 華亭翁Ⅱ岡本花亭(一七六七—一八五〇)名は成、字は子省・王汝、通称は忠次郎。華(花)亭は号。幕臣。『漢文學者総覧』一〇九頁・一六〇六番を参照。

(3) 「而反午飯翁小酌東叡山下酒楼」は欄外の墨筆による加筆。

(4) 東叡山Ⅱ上野寛永寺の山号。

(5) 村瀬誨輔Ⅱ村瀬石庵（一七八一—一八五六）、名前は誨輔、字は季徳、号は石庵・旭齋。尾張の人。昌平黌教授を務める。田辺氏の養子となり、田辺晋二郎とも称す。既出『漢文学者総覧』四三八頁・五九八六番を参照。

二月十三日

(1) 本多伯楸Ⅱ本多思斎（一二八一—一八四一）名は楸、字は伯楸、思斎は号。別号廬軒・木瓜子。通称茂一郎。一斎の高弟。常陸の人。山城淀藩儒。『漢文学者総覧』四〇一頁・五四四一番を参照。『升堂記』（九二頁）文化十年（一八一三）の記録に依ると「本多茂一郎。口入佐藤捨藏。住四谷。処士。」とある。『海鷗社文会照名録』（既出『古賀穀堂先生小伝』一三八頁所引）にも名を連ねる。

(2) 「開晩」より「而去」に至るまでは、欄外の墨筆による加筆。

二月十四日

(1) 牧直郷Ⅱ牧野黙庵（一七九六—一八四九）、名は古愚、字は直卿、黙庵は号。讃岐の人。管茶山、一斎に学ぶ。高松藩儒。『漢文学者総覧』四〇五頁・五五〇八番参照。

二月十五日

(1) 「今朝」より「不能往」に至るまでは、欄外の墨筆による加筆。

(2) 「陰晴不定晩雨」は欄外の墨筆による加筆。

二月十六日

(1) 「失履」は欄外の墨筆による加筆。

二月十七日

(1) 川子興Ⅱ一斎の女婿、河田猶興を指すか。本稿天保二年一月十二日条を参照。

(2) 太塔王Ⅱ護良親王のこと。後醍醐天皇の皇子。大塔宮とも称された。『文草』乙冊に「擬大塔王獄中上書」（文政九年、一八二六、十一月二十一日）が収録されている。宿題に対して、以前制作していたこの文を提出したものと考えられる。

(3) 栗山翁Ⅱ柴野栗山（一七三六—一八〇七）名は邦彦、讃岐の人。林復軒の門人となり昌平黌に学ぶ。のち幕府の儒官となり、昌平黌の教官となる。寛政三博士の一人。

(4) 古賀穀堂Ⅱ古賀穀堂（一七七七—一八三六）名は燾、字は溥卿、佐賀の人。

父古賀精里に学ぶ。江戸在留中の穀堂を中心に海鷗社文会は運営された。『海鷗社文会規約』（西村謙三編『古賀穀堂先生小伝』私家版、一九三五年、一三六頁所引）によれば、会主が翌月の会の文題を予め知らせておく（宿題）、参加者は毎月一回、十七日定例の会に作文・浄書して持ち寄り、席上で論難した。

二月二十一日

(1) 鍵屋半兵衛Ⅱ石田醒斎、名は篤、字は伯孝。日本橋金吹町（現在の日本橋本石町周辺）に住む呉服屋。山本北山に学ぶ。蔵書家でもあり、多くの文人と交流があつた。森銑三「石田醒斎とその交友」（『森銑三著作集』第七巻、一九七一年、中央公論社）を参照。

二月二十三日

(1) 「二十三日」は墨筆、以下は朱筆。

二月二十四日

(1) 「二十四日」朱筆。

三月朔

(1) 「過石田醒齋謝前日之供惠」は欄外の墨筆による加筆。

(2) 藤井生・朝川氏Ⅱ朝川氏は朝川善菴（一七八一—一八四九）を指す。名は鼎、字は五鼎、号は善菴。江戸の人。山本北山に学ぶ。松浦藩儒。折衷学。『漢文学者総覧』一六頁・二二七番を参照。天保元年五月二十一日条（『翻刻』（二）六〇頁）「訪朝川翁面話藤井秀氏」、同十月二十三日条「更訪朝川五鼎面秀成生與五鼎閑話」（『翻刻』（二）六九頁）によれば、藤井生とは藤井秀成のことか。伝不詳。

(3) 慈眼堂Ⅱ東叡山（上野寛永寺・輪王寺）のことか。現在の台東区に位置す

る天台宗寺院。両大師、開山堂とも称される。

三月三日

(1) 「今日」より「四百枚」に至るまでは、欄外の墨筆による加筆。

(2) 毛利侯Ⅱ清末藩主毛利元世のこと。天保元年十月二十一日条(「翻刻」)(二六九頁)によれば、「借読」の依頼に応じ、清末侯に『戦国策』稿本を貸し出していた。

三月四日

(1) 光秀論Ⅱ『文章』甲冊所収「論明智光秀」のこと。

三月七日

(1) 高橋善次Ⅱ高橋善次(一七八八—一八三四)、名は栗、字は子寛、号は復斎、通称善次。松山の人。古賀精里門下。朱子学。松山藩儒。『漢文学者総覧』二七〇頁・三六八八頁。

三月八日

(1) 「晨前田生來報喜事」「□□□□下。」「此日與張藩士相面者數人尾藩山本半丘老人及——良藏等也」は欄外の墨筆による加筆。

(2) 欄外に墨筆にて「西川生。生幕府小吏在佐渡管金礦者。」の頭注あり。

(3) 志毛藕塘Ⅱ名は正應、字は子健、藕塘は号。江戸の人。一斎に学ぶ。既出『漢文学者総覧』一二二頁・三〇二七番を参照。「海鷗社文会照名録」(既出『古賀穀堂先生小伝』一三七頁所引)にも名を連ねる。

三月九日

(1) 西園Ⅱ山口西園(一七七九—一八五二)、名は直淳、号は西園。安芸の人、広島藩儒臣。山口西里の長子。古義学。秋陽は江戸遊学前に従学した。既出『漢文学者総覧』四五八頁・六二五二番を参照。

三月十日

(1) 萬八樓Ⅱ柳橋・万屋八郎兵衛の貸座敷のこと。

三月十二日

(1) 飛鳥山Ⅱ桜の名所。現在の東京都北区王子。

三月十四日

(1) 「午後」より「大雨」に至るまでは朱筆。

三月十五日

(1) 「十五日」朱筆。

(2) 大七Ⅱ料理屋。秋葉権現(現在の墨田区向島)門前。

(3) 北里Ⅱ吉原を指す。

三月十八日

(1) 遜志齋Ⅱ方孝孺(一三五七—一四〇二)、字は希直・希古、号は遜志。寧海(浙江省)の人。正学先生と称される。『明史』卷一四一、『明儒学案』卷四三に伝あり。ここでの「文粹」は、『方正学文粹』六卷のことと推定される。村瀬誨輔の編、文政元年(一八一八)年序刊。長澤規矩也編『和刻本漢籍文集』第一輯(二〇一一年、汲古書院)を参照。村瀬誨輔については本稿天保二年二月十一日条を参照。

三月二十四日

(1) 本条の欄外に「△鳴門書到送致文侍集價」の墨筆あり。挿入箇所は不詳。

三月二十六日

(1) 欄外に「夜諸子會讀孟子」の墨筆あり。

三月二十八日

(1) 「如例」より「雨」に至るまで朱筆。

三月二十九日

(1) 「二十九日」朱筆。

(2) 「出城」より「辭去」に至るまでは、欄外の墨筆による加筆。

四月四日

(1) 本条の欄外に「△以病辭小柳津氏」の墨筆有り。挿入箇所は不詳。

四月十二日

(1) 「□店」より「從遊余」に至るまでは、欄外の墨筆による加筆。

(2) 町野生Ⅱ熊本藩士 町野玄肅か。本稿天保二年四月十六条を参照。

四月十三日

- (1) 本条の欄外に「自己丑九月十五日到辛卯四月十三日日數五百六十八」の墨筆あり。

四月十六日

- (1) 町野玄肅〓熊本藩士。『升堂記』(一〇九頁) 文政十一年(一八二八)の記録に「入門六月二十日。紹介沢村武左衛門。細川越中守家来。」とある。「海鷗社文会照名録」(既出『古賀穀堂先生小伝』一三九頁所引)にも名を連ねる。

四月十七日

- (1) 日影町〓芝口(現在の港区新橋)に存在した町名。
(2) 安國殿・三縁山〓安國殿は徳川家康の院号「安國院殿」、あるいは芝・増上寺内の家康を祀る廟を指す。現在の芝東照宮。三縁山は増上寺の山号。
(3) 鍛冶町〓新橋(現在の港区新橋)に存在した町名。

四月十八日

- (1) 愛日樓〓一斎の僑居。林大学頭邸内(現在の千代田区馬場先門周辺)。

四月二十八日

- (1) 「因約王子之行」は欄外の墨筆による加筆。

四月二十九日

- (1) 目白不動・護國寺〓目白不動尊と神靈山護國寺。いずれも現在の文京区に位置した。

- (2) 柳灣翁〓館柳灣(一七六二—一八四四)、名は機、字は枢卿、柳灣は号。

- 新鴻の人。亀田鵬齋に学ぶ。『漢文学者総覧』二七九頁・三八二番を参照。

- (3) 瀧川辨才天女祠〓王子滝川山松橋院金剛寺(現在の北区)前の松橋弁天あるいは岩屋弁天を指すか。

- (4) 金輪寺〓王子権現・稻荷の別当、金輪寺を指す。

- (5) 道灌山〓日暮里の地名。丘陵。

五月二日

- (1) 石田誠齋〓石田醒斎のこと。本稿天保二年二月二十一日条を参照。

五月三日

- (1) 國府臺〓下総国府台跡(現在の千葉県市川市に位置)。古くは下総国の国府が置かれた。戦国時代中期、里見氏と後北条氏が争った古戦場。欄外に「國府一作鴻有故事」の墨筆あり。

- (2) 羅漢寺〓安国山総寧寺を指すか。羅漢の井と呼ばれる井戸が隣接する。現在の千葉県市川市国府台に位置する曹洞宗寺院。

- (3) 眞間弘法寺〓眞間山弘法寺。千葉県市川市眞間に位置する日蓮宗寺院。

- (4) 行徳〓下総国行徳のこと。江戸川水運の河港。

五月七日

- (1) 渡邊華山(一七九三—一八四二)〓名は定静、字は子安・伯登、通称登・昇。三河田原藩士。鷹見星卓・佐藤一斎・松崎慊堂らに師事する。画家・蘭学者としても名有り。蚕社の獄によって捕らえられ、のち自刃した。既出『漢文学者総覧』四八六頁・六六二九番を参照。

- (2) 慊堂〓松崎慊堂(一七七一—一八四四)、名は復、字は明復。肥後の人。林述斎に師事し昌平黌に学ぶ。遠江掛川藩儒として出仕する。致仕したのちは羽沢村(現在の渋谷区広尾付近)に隠居する。既出『漢文学者総覧』四一〇頁・五五八九番を参照。『慊堂日暦』同日条に「華山外史・本多、酒を載せて来り、留語して昏に及んで辞去す。」(東洋文庫『慊堂日暦』3 山田琢訳注、一九七三年、平凡社、一六三頁)とある。

五月八日

- (1) 頼餘一〓頼聿庵(一八〇一—一八五六)、名は元協、字は承緒、号は聿庵、通称餘一。安芸の人、広島藩儒。頼山陽の長子。既出『漢文学者総覧』四七八頁・六五四九番を参照。

五月十二日

- (1) 「過話華亭翁歸路結髮」は欄外の墨筆による加筆。

五月十四日

(1) 「當直」より「晴風」に至るまでは朱筆。

(2) 冠山老公〓池田冠山(一七六七—一八三三)、名は定常、字は君倫、冠山は号。佐藤一斎に師事する。因幡鳥取西館新田藩(若桜藩)第五代藩主。既出『漢文學者總覽』四〇頁・五九四番を参照。

(3) 賀頼翁序〓『文章』甲冊に「賀頼杏坪先生致仕序」として収録されている。
五月十五日

(1) 「十五日」朱筆。

五月十七日

(1) 澤三郎〓澤熊山(一七七九—一八五五)、名は微、字は子慎、号は熊山、通称三郎。阿波の人。伊勢神戸藩藩儒。江戸振徳堂で教える。既出『漢文學者總覽』二二五頁・二九八番を参照。「海鷗社文会照名録」(既出『古賀穀堂先生小伝』一三七頁所引)にも名を連ねる。

五月十八日

(1) 昌谷子〓昌谷精溪(一七九二—一八五八)のことか。名は碩、字は子儼、精溪と号す。一歳に学ぶ。津山藩儒。『漢文學者總覽』二二二頁・二九四三番を参照。「海鷗社文会照名録」(既出『古賀穀堂先生小伝』一三七頁所引)にも名を連ねる。

五月二十一日

(1) 安積良齋〓(一七九一—一八六一)、名は重信・信、字は思順・子順、号は良齋・見山楼。通称祐介。岩代郡山の人。林述齋・佐藤一斎に師事する。二本松藩儒、のちに昌平黌教授。既出『漢文學者總覽』一頁・三番を参照。「海鷗社文会照名録」(既出『古賀穀堂先生小伝』一三七頁所引)にも名を連ねる。

(2) 關研次〓関藍梁(一八〇五—一八六三)、名は研、字は克精、藍梁は号。通称は研次。近江高島の人。昌平黌で林述齋に師事する。膳所藩儒。既出『漢文學者總覽』二五一頁・三四三五番を参照。

六月六日

(1) 「伯氏」より「之計」に至るまでは、欄外の墨筆による加筆。

(2) 五部〓欄外に墨筆にて「八大家讀本 十六冊。本義通釋 七冊。小學纂注 四冊。松陽議義 四冊。解頤 二冊。」の頭注あり。

六月八日

(1) 「近藤誠輔寄書。光藤禎心寄詩。皆託鈴木氏。」は欄外の墨筆による加筆。

六月十五日

(1) 堯峯集〓『堯峰文鈔』のことか。清・汪琬の撰。汪琬、字は茗文、堯峯は号。

(2) 接鮮紀事〓林述齋と朝鮮通信使との会見に書記として同席した慊堂が記録したもの。『慊堂全集』(崇文院、一九二六年)卷二十三所収。

六月十六日

(1) 欄外に墨筆にて「水府立原甚太郎。丸亀加藤優二。□□□人。同藩小川入馬。堤鴻佐。大久保七之助。開寶□之介。赤井嚴三。安積祐輔。上田恪之助。清水太郎。牧□左衛門。□條□衛門。外三四人不知名。」の頭注あり。堤鴻佐は、堤它山(一七八三—一八四九)のこと。名は公愷、字は公甫、通称は鴻佐・鴻之佐、它山と号す。越前の人。姫路藩儒。太田錦城・佐藤一斎に師事する。既出『漢文學者總覽』二九一頁・三九七九番を参照。安積祐輔は安積良齋のこと。本稿天保二年五月二十一日条を参照。

六月十八日

(1) 荻生惣右衛門〓荻生櫻水、名は維則、字は式卿、号は櫻水・荻生、通称惣右衛門。荻生徂徠の曾孫。既出『漢文學者總覽』一一一頁・一六二七番を参照。「海鷗社文会照名録」(既出『古賀穀堂先生小伝』一三九頁所引)にも名を連ねる。

(2) 辛島翁〓辛島鹽井のことか。名は憲・知雄、字は伯彝、号は鹽井、通称才藏。熊本藩儒。のち昌平黌教授。『漢文學者總覽』一三七頁・一九八八番を参照。

六月十九日

(1) 有竹居集Ⅱ清・任兆麟の『有竹居集』を指すか。任兆麟、字は文田。江蘇震澤(現在の江蘇省蘇州市の一部)の人。

六月二十五日

(1) 本条の後、林檎宇・頼山陽・松崎慊堂・岡本花亭の詩などを写した雑筆一丁あり。

六月二十六日

(1) 六月二十五日条と六月二十六日条の間に乱丁あり。本冊三丁表より五丁表に、六月二十六日と七月二十一日条が追記されている。

六月二十八日

(1) 古賀洞庵Ⅱ(一七八八―一八四七)、名は煜、字は季暉、洞庵は号。古賀精里の三男。肥前の人。昌平黌教授。既出『漢文學者總覽』一八七頁・二六三三番を参照。

六月十二日

(1) 町野生Ⅱ熊本藩士 町野玄肅か。本稿天保二年四月十六条を参照。

七月朔

(1) 赤井士巽Ⅱ赤井東海のこと。士巽は字。本稿天保二年正月十九日条を参照。

七月三日

(1) 警余録序Ⅱ『文章』甲冊に「警余録序」が収録されている。

七月四日

(1) 卷弘齋Ⅱ巻菱湖のこと。名は大任・任、字は致遠、号は弘齋・菱湖。江戸の書家。既出『漢文學者總覽』四〇五頁・五五一一番を参照。

七月九日

(1) 「過芦野玉井二子」は欄外の墨筆による加筆。

七月十日

(1) 辛嶋氏Ⅱ辛島鹽井のことか。本稿天保二年六月十八日条を参照。

七月十一日

注(卷二)

(2) 二州橋Ⅱ両国橋のこと。隅田川に架かる橋。

(3) 江戸橋Ⅱ現在の日本橋川に架かる橋。

七月十六日

(1) 「朝出城」より「過小柳津氏署」に至るまでは、欄外の墨筆による加筆。

七月十八日

(1) 「午後」より「講書」に至るまでは、欄外の墨筆による加筆。

七月十九日

(1) 武機捷録Ⅱ王陽明の兵学書『歷朝武機捷録』十五卷のことか。永富青地『王守仁の佚存書『歷朝武機捷録』について』『九州中国学会報』第三十九巻)を参照。

七月二十日

(1) 檉宇公Ⅱ林檉宇(一七九三―一八四六)、名は名は銑・銑蔵、字は用韜、号は檉宇・培斎。林述齋の三男。佐藤一斎・松崎慊堂に学び、天保九年(一八三八)に大学頭となる。既出『漢文學者總覽』三六一頁・四九一八番を参照。

七月二十三日

(1) 本条で一卷(二冊目)了。本資料は罫線刷料紙に墨筆あるいは朱筆で筆写した写本であるが、裏見返しには「書林廣島中島本町世並屋伊兵衛」の刊記がある。また、裏見返しに「岡本「下谷子□壁□□」大窪「同上」朝川「本莊横網小泉町」赤井「飯田町二十板橋」東「向柳原佐久間町三丁目能勢氏」安積「駿河臺富士見坂」牧野「水道橋内中嶋良□□邸中」菊池「水道橋内ミサキ稻荷前高橋別邸」の墨筆あり。

*

*

*

(1) 外表紙に「讀我書樓長曆〔起天保癸巳六月十九日〕」の題簽あり。「三卷〔此前壬辰ヨリ癸巳六月マデノ二卷〇見ヘズ搜索スベシ。癸巳六月十九日ヨリ甲午六月十五日マデ。〕」の朱筆書き入れあり。表紙見返しに「長崎八幅丁。神代徳次郎内。神代泰介。」「筑後久留米領田主丸驛。二官慎齋。〔名清。字叔和。甲午三月十九日來訪。〕」の墨筆あり。

癸巳六月十九日

(1) 癸巳〓天保四年（一八三三）、秋陽三十七歳。

(2) 天神街之居〓天神町は現在の広島市中区中島町に存在した町名。帰郷した秋陽の健康状態・経済状況は思わしくなく、それもあってか妻と二女を实家に、長女を本家に預け、自身は猿楽町の米屋忠左衛門の別荘に独居した。のち妻と娘は天神町の吉田屋佐助の水楼に寓居した。「天神街之居」とはそれを指す。広島城外堀の南・猿楽町（現在の広島市中区大手町）の秋陽の独居先は「南街（居）」と記される。既出『吉村秋陽・東沢瀉』四〇・四一頁参照。

(3) 文集…〓墨筆にて「文集三十九答許順之書」の頭注あり。「朱子曰」字を補い『文集』から抄出。『朱子文集』卷三十九・答許順之第十九書（一七五一頁）を参照。以降、凡例の略称に従い略記し、頁数は『晦庵先生朱文公文集』（『朱子全書』第二十〓第二十五冊、上海戸籍出版社・安徽教育出版社、二〇〇二年）による。

六月二十日

(1) 歐文精華錄〓「歐文」については不詳。「精華錄」とは、清・王士禎撰の『精華錄』のこと。王士禎（一六三四—一七一）、名はもと士禎、士正、字は貽上、漁洋山人と号す。山東新城の人。『清史稿』卷二六六・王士禎列伝を参照。

六月二十一日

(1) 南街居〓秋陽の僑居。広島城外堀の南・猿楽町（現在の広島市中区大手町）米屋忠左衛門の別荘。天保四年六月十九日条・注(2) 参照。

(2) 佐藤梶〓佐藤立軒（一八二—一八八五）、名は梶・梶、字は亦光、通称新九郎。佐藤一斎の第三子。『漢文學者総總覽』三〇五頁・二八四三番を参照。

六月二十二日

(1) 漁洋詩〓漁洋は王士禎の号「漁洋山人」のこと。本稿六月二十日条、注(1)を参照。

六月二十三日

(1) 文集…〓墨筆にて「文集四十答何叔京」の頭注あり。「朱云」字を補い『文集』から抄出している。『文集』卷四十・答何叔京・第二十五書（一八三六頁）を参照。

(2) 又…〓墨筆にて「又」の頭注あり。『文集』卷四十・答何叔京・第三十二書（一八四五頁）を参照。

六月二十四日

(2) 近世叢語〓角田九華（一七八四—一八五六、名は簡、字は大可・廉夫。豊後岡藩士）の著した近世人物の逸話略伝集。文政十一年（一八二八）刊、八卷四冊。自序のほか、佐藤一斎・頼山陽の叙がある。『新版日本思想史文献解題』（大倉山精神文化研究所編、角川書店、一九九二年、一〇九頁）参照。

六月二十六日

(1) 孟子…〓欄外に墨筆にて「孟子公孫丑」の頭注あり。公孫丑上篇「無惻隱之心、非人也。無羞惡之心、非人也。無辭讓之心、非人也。無是非之心、非人也。惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、禮之端也。是非之心、智之端也。人之有是四端也、猶其有四體也。」に関する論文。

(2) 四德…〓欄外に墨筆にて「四德四端」の頭注あり。公孫丑上篇・人皆有不忍人之心章に関する論文。

(3) 孟子…〓欄外に墨筆にて「孟子萬章」の頭注あり。『孟子』万章上篇「萬章問曰、舜往于田、號泣于旻天、何爲其號泣也。孟子曰、怨慕也。萬章曰、

父母愛之。喜而不忘。父母惡之、勞而不怨。然則舜怨乎。曰、長息問於公明高曰、舜往于田、則吾既得聞命矣。號泣于旻天、于父母、則吾不知也。公明高曰、是非爾所知也。夫公明高以孝子之心、為不若是怨、我竭力耕田、共為子職而已矣、父母之不我愛、於我何哉。」に関する論文。

- (4) 論語：『論語』陽貨篇「子曰、小子何莫學夫詩。詩可以興。可以觀、可以羣、可以怨。」とあるのを参照。

- (5) 小弁之怨『詩経』小雅「小弁」の詩について、『孟子』告子下篇に「公孫丑問曰、高子曰、子弁小人之詩也。孟子曰、何以言之。曰、怨。曰、固我高叟之為詩也。有人於此。越人關弓而射之、則己談笑而道之、無他、疏之也。其兄關弓而射之、則己泣而道之、無他、戚之也。小弁之怨親親也。親親仁也。固矣夫高叟之為詩也。曰、凱風何以不怨。曰、凱風親之過小者也。小弁親之過大者也。親之過大而不怨、是愈疏也。親之過小而怨、是不可磯也。愈疏不孝也、不可磯亦不孝也。孔子曰、舜其至孝矣、五十而慕。」とあるのを参照。

- (6) 内則『礼記』内則篇に「子婦未孝未敬。勿庸疾怨。」とあるのを参照。

- (7) 一齋子『佐藤一齋』『孟子欄外書』萬章上・萬章章「怨字只是憂惱苦悶見一念思慕切處。認作怨親固不可。認作自怨亦未可。」などを踏まえているか。

- (8) 理氣『欄外に墨筆にて「理氣」の頭注あり。

- (9) 性善『欄外に墨筆にて「性善」の頭注あり。

- (10) 惡亦性：『欄外に墨筆にて「惡亦性」の頭注あり。『河南程氏遺書』卷一「生之謂性。性即氣、氣即性、生之謂也。人生氣稟、理有善惡、然不是性中元有此兩物相對而生也。有自幼而善、有自幼而惡、是氣稟有然也。善個性也、然惡亦不可不謂之性也。』(『二程集』理學叢書、北京・中華書局、一九八一年、一〇頁。以下、頁数は理學叢書本による。)に関する論文。

- (11) 觀牛師『文草』甲冊に「書觀牛上人東遊卷後」が収録されている。伝不詳。

六月二十七日

- (1) 修吾老人『加藤香園の父。『文草』丙冊に「修吾翁七十壽序」が収録されており、「加藤珠文之父曰修吾翁。」とある。伝不詳。加藤香園については、本稿天保二年正月五日条の注を参照。

六月二十九日

- (1) 仁心『欄外に墨筆にて「仁心」の頭注あり。

- (2) 虛靈主宰一身者『もと「知覺」に作る。墨筆にて訂正す。

- (3) 此『もと「義禮智三者皆出於此而」十字あり。墨筆見消の上で「此」一字を加筆す。

- (4) 「義禮智」『もと「斯」に作る。墨筆にて訂正す。

- (5) 孟子云『孟子』尽心下「孟子曰。仁也者人也。合而言之道也。」告子上篇「孟子曰。仁人心也。義人路也。」を参照。

- (6) 動靜『欄外に墨筆にて「動靜」の頭注あり。

- (7) 動亦定靜亦定『程明道「定性書」に「所謂定者、動亦定、靜亦定。無將迎、無内外」(『二程集』四六〇頁)とあるのを参照。

- (8) 動亦動靜亦動『王文成公全書』卷五「答倫彦式」に「故求靜之心即動也、惡動之心非靜也。是之謂動亦動、靜亦動、將迎起伏、相尋於無窮矣。」とあるのを参照。

七月朔

- (1) 墨筆にて「精華錄卷八」の頭注あり。『漁洋山人精華錄』では卷八ではなく卷九・近体詩にこの「題乘風波浪四首」が見える。その四首のうち第一首を本条では抄出している。

七月二日

- (1) 文集『欄外に墨筆にて「文集四十二答胡廣仲」の頭注あり。「朱云」字を補い『文集』から抄出している。『文集』卷四十二・答胡廣仲・第五書(一九〇二頁)を参照。

- (2) 常摠『文集』「摠」を「総」に作る。

七月三日

(1) 關大夫Ⅱ伝不詳。『文章』丁冊に「關大夫六十壽序」が収録されており、「關氏我藩右族。世濟忠貞。今大夫松棲君。自執政垂三十年。」とある。

七月四日

(1) 同卷Ⅱ欄外に墨筆にて「同卷。答石子重」の頭注あり。「朱曰」字を補い『文集』から抄出している。『文集』卷四十二・答石子重・第九書（一九三〇頁）を参照。

(2) 又Ⅱ欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。「問目」「答」の割注は筆者に係る。『文集』卷四十二・答石子重・第十一書（一九三八頁）を参照。

七月五日

(1) 篆字彙Ⅱ墨筆にて「篆字彙」の頭注あり。『篆字彙』清・修世男撰、十二卷。本条は「己」「巳」「已」字に関する記述を『篆字彙』寅集・己部より抄出している。書体を筆写している箇所は、本条においては□の記号で示す。

七月八日

(1) 四十三Ⅱ欄外に墨筆にて「四十三答林擇之」の頭注あり。『文集』卷四十三・答林擇之第十二書（一九七一頁）を参照。

(2) 同上Ⅱ欄外に墨筆にて「同上」の頭注あり。「又云」字を補い『文集』から抄出している。『文集』卷四十三・答林擇之第十七書（一九七七頁）を参照。

七月十一日

(1) 「十六日」の下、もと「為廣沢生講繫辭傳自今日始」十二字あり。墨筆見消。

七月十二日

(1) 精華錄Ⅱ墨筆にて「精華錄卷十」の頭注あり。『漁洋山人精華錄』卷十「億石帆亭寄兒輩四首」第二首「磬口檀心世外香。幽姿那點壽陽妝。祇宜霽雪明窗裏。手搗疎花寫硬黃。」から結句を抄出している。清・金榮榮が注を付した『漁洋山人精華錄箋注』卷十二には「帳世南遊宦紀聞。響搗謂以紙覆

其上就明窗牖間映光摹之。」の箋注があり、本条の割注はそれを引用したものと考えられる。

(2) 又Ⅱ墨筆にて「又」の頭注あり。『漁洋山人精華錄』卷十「正月上旬過朱竹垞太史齋中諸花盛開賦二絕句」第一首「馬塍曾說野人家。每先東皇管物華。今歲長安霜雪少。試燈風裏見唐花。」から結句を抄出している。『漁洋山人精華錄箋注』卷十二には「田汝成西湖志餘。馬塍藝花往往發非時之品。凡花之早放者名曰唐花。唐亦作堂。」の箋注があり、本条の割注はそれを引用したものと考えられる。

七月十四日

(1) 四十四Ⅱ欄外に墨筆にて「四十四答方伯謨」の頭注あり。「朱云」字を補い『文集』から抄出している。『文集』卷四十四・答方伯謨第一書（二〇〇八頁）を参照。

(2) 又Ⅱ欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。『文集』卷四十四・答方伯謨第二書（二〇一〇頁）を参照。「按」以下の割注は筆者に係る。

(3) 又Ⅱ欄外に墨筆にて「又答梁文叔」の頭注あり。『文集』卷四十四・答梁文叔第四書（二〇二六頁）の内容を指していると考えられる。「以文長故不具錄」とあるように、「鬼神」以下は『文集』からの引用ではなく筆者に係る。

七月十七日

(1) 西福院Ⅱ木挽町（現在の広島県広島市中区中島町）に位置した真言宗寺院。

七月十八日

(1) 四十五Ⅱ欄外に墨筆にて「四十五答丘子野」の頭注あり。「朱曰」字を補い『文集』から抄出している。『文集』卷四十五・答丘子野第一書（二〇六五頁）を参照。

(2) 又答胡寬夫Ⅱ欄外に墨筆にて「又答胡寬夫」の頭注あり。『文集』卷四十五・又答胡寬夫第一書（二〇六九頁）を参照。

(3) 四十五Ⅱ欄外に墨筆にて「又答吳德夫」の頭注あり。『文集』卷四十五・

答吳徳夫第一書（二〇七〇頁）を参照。

- (4) 拙堂文話Ⅱ斎藤拙堂の文集。文政十三年（一八三〇）刊本を見たか。斎藤拙堂、名は正謙、字は有終、号は拙堂、伊勢津藩の人。昌平饗で古賀精里に学ぶ。『漢文學者總覽』二〇八頁・二八八五番を参照。既出「海鷗社文会照名録」（二三九頁）に名を連ねる。

七月十九日

- (1) 文話Ⅱ欄外に墨筆にて「文話」の頭注あり。既出『拙堂文話』卷二より抄出している。斎藤正和『全釈 拙堂文話』（明徳出版社、二〇一五年、一二二頁）を参照。

- (2) 又Ⅱ欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。既出『拙堂文話』卷二より抄出している。既出『全釈 拙堂文話』（二二四頁）を参照。

- (3) 又Ⅱ墨筆にて「又」の頭注あり。既出『拙堂文話』卷二より抄出している。既出『全釈 拙堂文話』（二二六頁）を参照。

七月二十日

- (1) 「詣」Ⅱもと「訪」に作る。墨筆にて訂正す。

七月二十二日

- (1) 又Ⅱ墨筆にて「又」の頭注あり。既出『拙堂文話』卷七より抄出している。既出『全釈 拙堂文話』（四七三頁）を参照。

- (2) 又Ⅱ墨筆にて「又」の頭注あり。既出『拙堂文話』卷七より抄出している。既出『全釈 拙堂文話』（四八三頁）を参照。

- (3) 頼承緒Ⅱ山陽の長子。本稿天保二年正月十五日条注を参照。

七月二十四日

- (1) 項羽紀Ⅱ『史記』卷七・項羽本紀のこと。

- (2) 廣澤生Ⅱ廣澤公輝のことか。伝不詳。『文草』乙冊に「廣澤生字説」が収録されており、「廣澤生。名篤余字之曰公輝。」とある。『文草』には他にも「送廣澤叔平還豊後序」（甲冊）・「栄送廣澤公輝序」（丙冊）・「答廣澤生書」（丁冊）が収められている。

七月二十五日

- (1) 史記Ⅱ『史記』卷八・高祖本紀の漢元年十月の記事を抄出している。漢元年十月に「秦王子嬰素車白馬、係頸以組、封皇帝璽符節、降軹道旁。」とあり、その正義に「按。天子有六璽、皇帝行璽、皇帝之璽、皇帝信璽、天子行璽、天子之璽、天子信璽。皇帝信璽凡事皆用之、璽令施行。天子信璽以遷拜封王侯、天子之璽以發兵。皆以武都紫泥封、青囊白素裏、兩端無縫。三秦記云、紫泥水在今成州。輿地志云、漢封詔璽用紫泥、則此水之泥也。」とあるのを参照。

七月二十六日

- (1) 都築子言Ⅱ『文草』乙冊に、「與都築子言書」（七月二十六日）が収録されている。

八月六日

- (1) 集四十七Ⅱ欄外に墨筆にて「集四十七」の頭注あり。「文公答呂子約問」「曰」字を補い『文集』から抄出している。『文集』卷四十七・答呂子約第十書（二一八頁）を参照。

- (2) 文意Ⅱ『文集』では、「文意如何」に作る。

- (3) 又Ⅱ欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。「又答」「之問曰」字を補い『文集』から抄出している。『文集』卷四十七・答呂子約・第十二書（二一八五頁）を参照。「按」以下の割注は筆者に係る。

- (4) 己斐村Ⅱ村名。現在の広島県広島市西区己斐周辺。「己斐村」の下、もと「更到」二字あり。墨筆見消。

- (5) 古江村Ⅱ村名。現在の広島県広島市西区古江周辺。

八月七日

- (1) 又Ⅱ欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。『文集』卷四十七・答呂子約第二十四書（二一九七頁）を参照。

- (2) 費盡Ⅱ『文集』では「費」に作る。

八月十日

(1) 赤馬關＝現在の山口県下関のこと。馬関とも呼ばれた。弘廬峯については不詳。

八月十二日

(1) 杏翁＝頼杏坪（一七五六―一八三四）、名は惟柔、字は千祺・季立、号は杏坪・春草・杏翁などと称す。安芸の人。亨翁の三男、山陽の叔父にあたる。天保五年没。『漢文學者總覧』四七八頁・六五五一番を参照。

八月十三日

(1) 小赤壁＝播磨国の景勝地。現在の兵庫県姫路市木場周辺。

八月十四日

(1) 披襟樓＝『文章』甲冊に「披襟樓記」が収録されており、「是爲落合氏之園矣。餘與主人有舊。時拉同志而遊焉。」とあり、この日、この庭園あるいは書楼で「集」会したか。

八月二十一日

(1) 四十八＝欄外に墨筆にて「四十八答子約」の頭注あり。『文集』卷四十八・答呂子約第十一書（二二二頁）を参照。

(2) 又＝欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。『文集』卷四十八・答呂子約第十一書（二二三頁）を参照。

(3) 此＝「此」の下、『文集』では「其」一字あり。

(4) 又＝欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。『文集』卷四十八・答呂子約第十一書（二二三頁）を参照。

八月二十五日

(1) 五日市村＝村名。現在の広島県広島市佐伯区五日市周辺。

八月二十七日

(1) 古江＝村名。現在の広島県広島市西区古江周辺。本稿八月六日条を参照。

八月二十八日

(1) 贈：＝『贈書於都築子言』もと無し。欄外の墨筆による加筆。

九月三日

(1) 文集四十九＝欄外に墨筆にて「文集四十九答王子合」の頭注あり。「問」「朱云」を補い『文集』から抄出している。『文集』卷四十九・答王子合第十三書（二二五八頁）を参照。

(2) 云々＝「云々」二字は筆者に係り、中略して引用している。

(3) 帶著＝『文集』、「帶却」に作る。

(4) 「孟子」の上、『文集』、「如」一字あり。

(5) 又＝欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。「問」「朱云」を補い『文集』から抄出している。『文集』卷四十九・答王子合第十三書（二二五九頁）を参照。

九月四日

(1) 杜詩偶評＝清・沈徳潜編、潘承松校。乾隆十二年（一七四七）の自序あり。四卷。享和三年（一八〇三）官版の和刻本（三冊本）を見たか。

(2) 前日＝「前日」より「同氏」に至るまでは、欄外の墨筆による加筆。

九月十一日

(1) 安積思順＝安積良斎。本稿天保二年五月二十一日条注を参照。

(2) 若山＝若山壮吉か。本稿天保二年正月十二日条注を参照。

(3) 本多伯茂＝本多思斎。本稿天保二年二月十三日条注を参照。

九月十二日

(1) 文集五十＝欄外に墨筆にて「文集五十答恭叔」の頭注あり。「朱云」二字を補い『文集』から抄出している。『文集』卷五十・答潘恭叔第二書（二三〇三頁）を参照。

九月十四日

(1) 大岡子栗＝大岡栗齋（一七九九―一八三六）、名は寛通・寛、字は子栗・士栗・廉平、近江の人。佐藤一斎に学ぶ。『漢文學者總覧』九〇頁・一三二〇番を参照。

(2) 辛卯＝天保二年（一八三一）を指す。

九月十六日

(1) 精華録＝墨筆にて「精華録」の頭注あり。『漁洋山人精華録』卷五「戲傲

元遣山論詩絶句三十二首」第二十首「十載鈴山水雪情。青詞自媚可憐生。彦回不作中書死。更遣匆匆唱渭城。」の承句の一部を抄出している。清・金榮が注を付した『漁洋山人精華録箋注』巻二には「李肇翰林志。凡太清宮道觀薦告詞文用青藤紙書朱字。謂之青詞。」とあるのを参照。

九月二十二日

- (1) 漢書Ⅱ『漢書』巻十三・異姓諸侯王表第一に「嚮應瘡於謗議。」とあり、その顔師古注に「嚮音響。響應者、如響之應聲。瘡、痛也。服音是也。」とある。異姓諸侯王表の本文は、後に『統文章規範』巻二に採られる。
- (2) 易繫辭Ⅱ『易経』繫辭上伝に「其受命也如響。」とある。

九月二十三日

- (1) 劉向封事云Ⅱ『漢書』巻三十六・楚元王伝・劉向列伝に「乃上封事諫曰：・（中略）：・君子獨處守正、不撓衆枉、勉彊以從王事、則反見憎毒讒慝、故其詩曰、密勿從事、不敢告勞、無罪無辜、讒口熬熬。」とある。

九月二十五日

- (1) 集五十一Ⅱ欄外に墨筆にて「集五十一」の頭注あり。「董叔重問」「朱云」を補い『文集』から引用している。『文集』巻五十一・答董叔重第八書（二三六九頁）を参照。
- (2) 正也Ⅱ朱子全書本（二三六九頁）は「正心」に作る。和刻本（岡田武彦・荒木見悟主編『近世漢籍叢刊』思想初編9『晦庵先生朱文公文集』（上）、中文出版社、一九七三年を参照）は「正也」に作る。
- (3) 同Ⅱ欄外に墨筆にて「同」の頭注あり。「朱云」を補い『文集』から引用している。『文集』巻五十一・答董叔重第八書（二三七一頁）を参照。

九月二十六日

- (1) 古和生：Ⅱ「古和生」以下は、欄外の墨筆による加筆。

九月二十七日

- (1) 劉向封事云Ⅱ『漢書』巻三十六・楚元王伝・劉向列伝に「枉矢夜光」とあり、その注に「應劭曰、流星也、其射如矢、蛇行不正、故曰枉矢流、以亂

伐亂。蘇林曰、有聲為天狗、無聲為枉矢也。」とある。

- (2) 漢書Ⅱ『漢書』巻四十三・叔孫通列伝に、「大行設九賓、臚句傳。」とあり、その顔師古注に「蘇林曰、上傳語告下為臚、下告上為句也。」とあるのを参照。

九月二十九日

- (1) 白神社Ⅱ神社名。現在の広島市中区中町に位置する。

十月朔

- (1) 文集五十一Ⅱ欄外に墨筆にて「文集五十一答黃子耕」の頭注あり。『文集』巻五十一・答黃子耕第八書（二三八一頁）を参照。

十月三日

- (1) 谷永論神怪書Ⅱ谷永、字は子雲、長安の人。本伝は『漢書』巻八十五に見える。谷永が漢の成帝に対し行った奏上が『漢書』巻二十五・郊祀志に見え、その奏上の一部を本条では抄出している。その文は後に「論神怪」として『統文章規範』巻三に採られる。

十月四日

- (1) 又Ⅱ欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。「萬正淳問」「朱子答」字を補い『文集』から抄出している。『文集』巻五十一・答萬正淳第四書（二三九六頁）を参照。

十月五日

- (1) 下岐蘇川記Ⅱ『文草』（乙冊）に、「下岐蘇川記」（十月五日）が収録されている。

十月七日

- (1) 河喜Ⅱ大坂の書肆、河内屋喜兵衛のこと。

十月八日

- (1) 鯉溪Ⅱ鯉溪・鯉村（十月十一日・十二日・十六日条参照）は、己斐村（現在の広島市西区己斐周辺）のことを指すか。本稿八月六日条を参照。

十月九日

(1) 文五十二〃欄外に墨筆にて「文五十二・答吳伯豐」の頭注あり。「伯豐問」「朱曰」字を補い、『文集』から抄出している。『文集』卷五十二・答吳伯豐第十九書（二四四三頁）を参照。

(2) 又〃欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。「問」「答」字を補い、『文集』から抄出している。『文集』卷五十二・答吳伯豐第十九書（二四四四頁）を参照。

(3) 又〃欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。「問」「答」字を補い、『文集』から抄出している。『文集』卷五十二・答吳伯豐第十九書（二四五二頁）を参照。

(4) 何〃『文集』では「何」の下に「也」一字あり。

十月十四日

(1) 欄外に「漢唐」より「書中」に至るまでの墨筆あり。引く所の「答熊夢兆書」は、『文集』卷五十五（二六二五頁）に、「孔子言關雎樂而不淫哀而不傷、是言樂不至於淫、哀不至於傷。今詩序將哀樂淫傷判作四事說、似錯會論語意、以此疑大序非孔子作。此說得之、大序未知果誰作也。」とあるのを参照。

(2) 爲廣叔石講詩〃原文に返り点あり。「廣叔石の爲に詩を講ず」と読んでいる。

(3) 朝陽館〃藩立の学問所とは別に、三原浅野氏が陪臣のために広島城内に設けた学問所。大石学編『近世藩制・藩校大事典』（吉川弘文館、二〇〇六年、七七七頁）を参照。

十月十八日

(1) 五十二〃欄外に墨筆にて「五十二・答伯豐」の頭注あり。「問」「答」字を補い、『文集』から抄出している。『文集』卷五十二・答吳伯豐第二十一書（二四五五頁）を参照。

十月二十日

(1) 贈浪華大鹽氏書〃『文章』乙冊に「與大鹽子起書」（十月二十一日）

十月二十五日

(1) 漢制度〃〃『後漢書』卷一・光武帝紀第一上に（建武元年）「九月、赤眉

入長安、更始奔高陵。辛未、詔曰……」とあり、その「詔」字に対する李賢注を本条では抄出している。

(2) 漢書〃〃『漢書』卷八十八・儒林伝に「博士江公世爲魯詩宗、至江公著孝經說、心嫉式、謂歌吹諸生曰、歌驪駒。」とあり、その「驪駒」字に対する注に「服虔曰、逸詩篇名也。見大戴禮。客欲去歌之。文穎曰、其辭云「驪駒在門、僕夫具存、驪駒在路、僕夫整駕」也。」とあるのを参照。

十月二十六日

(1) 朱子語類〃欄外に墨筆にて「朱子語類八十」の頭注あり。『朱子語類』卷八十・詩一（二〇九一頁）を参照。以下、『朱子語類』については『語類』と略記し、頁数は理学叢書本（北京中華書局、一九八六年）による。

(2) 做〃理学叢書本は「被」に作る。和刻本（『朱子語類大全』中文出版社影印、一九七三年）は「做」に作る。

十一月六日

(3) 門〃理学叢書本は「們」に作る。和刻本は「門」に作る。

十一月八日

(1) 史伯夷傳〃『史記』卷六十一・伯夷列伝のこと。

(1) 五十三〃欄外に墨筆にて「五十三・答胡季隨」の頭注あり。『文集』卷五十三・答胡季隨第十三書（二五二〇頁）を参照。

(2) 又〃欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。『文集』卷五十三・答胡季隨第十四書（二五二六頁）を参照。

(3) 山口清介〃山口鳴鶴（一七九八—一八二七）、名は直節、初号は西樵・鳴鶴、通称は清介・清助。広島藩家老上田氏の講学所の教授となる。山口西里の子、昆（兄）は西園。『漢文學者總覽』四五八頁・六二五九番を参照。

十一月九日

(1) 曉〃「曉」の上、もと「金丸氏請未言志錄託人借之」十二字あり。墨筆見消。

(2) 傳福寺〃材木町（現在の広島市中区中島町）の曹洞宗寺院を指すか。

十一月十五日

- (1) 有司Ⅱ「有司」の下、もと「做詩一篇」四字あり。墨筆見消。
- (2) 桂冠出嶽集Ⅱ梅辻春樵（一七七六—一八五七）の詩文集。天保壬辰（三年、一八三二）の序あり。春樵、名は希聲、字は延調・子琴、近江の人、儒者・詩家。『漢文學者總覽』七二頁・一〇五八番を参照。

十一月二十日

- (1) 柳州：Ⅱ柳宗元「与楊誨之第二書」からの抄出。柳宗元、字は河東（現在の山西省）の人。柳河東、柳柳州とも称される。『柳河東集』卷三十三・与楊誨之第二書に「今吾先盡陳者、不欲足下如吾更訕辱、被稱號、已不信於世、而後知慕中道、費力而多害。故勤勤焉云爾而不已也。子其詳之熟之、無徒為煩言往復、幸甚。」とあるのを参照。「故勤勤焉云爾」を、本条では「故勤々云尔」に作り「云尔」の脇に白丸傍点が付されている。
- (2) 又Ⅱ欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。『柳河東集』卷三十三・与楊誨之第二書に「足下所為書、言文章極正、其辭奧雅。後來之馳於是道者、吾子且為蒲揲缺是、何可當也。其說韓愈處甚好。其他但用莊氏國語文字太多、反累正氣、果能遺此、則大善矣。」とあるのを参照。

十一月二十五日

- (1) 洗心洞筍記Ⅱ大塩中斎の著。上下二巻。天保四年成立、同六年刊行。天保四年夏四月の「自述」、天保六年夏四月の「後自述」あり。前出『新版日本思想史文献解題』三〇五頁参照。大塩中斎（一七九三—一八三七）、名は正高・後素、字は子起、号は連斎・中斎・洗心洞など、通称平八郎。『漢文學者總覽』九三頁・一三五三番を参照。

十一月二十六日

- (1) 天満街Ⅱ現在の広島県広島市西区天満町周辺のことか。

十二月三日

- (1) 病Ⅱ「病」の下、もと「下血止」三字あり。墨筆見消。

十二月十四日

- (1) 桶Ⅱ「桶」の下、もと「歸路」二字あり。墨筆見消。

十二月二十一日

- (1) 五十三Ⅱ欄外に墨筆にて「五十六答鄭子上書」の頭注あり。「子謂韶章」「朱云」字を補い『文集』より抄出している。『論語』八佾篇「子謂韶盡美」章についての問答。『文集』卷五十六・答鄭子上第十二書（二六八五頁）を参照。
- (2) 又Ⅱ欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。「朱云」字を補い「云々」字により途中省略して『文集』より抄出している。『文集』卷五十六・答鄭子上第十四書（二六八八頁）を参照。

十二月二十四日

- (1) 大鹽子起Ⅱ子起は大塩中斎の字。通称平八郎。十一月二十五日条・注（1）を参照。
- (2) 五十七Ⅱ欄外に墨筆にて「五十七答陳安卿」の頭注あり。「云々」字により途中省略し、「朱云」を補い『文集』より抄出している。『文集』卷五十七・答陳安卿第一書（二七〇九頁）を参照。

十二月二十五日

- (1) 又Ⅱ欄外に墨筆にて「又」の頭注あり。「仁者先難章」「朱曰」字を補い『文集』より抄出している。「意恐章字」の小字双行注は筆者に係る。『論語』雍也篇に関する問答。『文集』卷五十七・答陳安卿第二書（二七二二頁）を参照。

十二月三十日

- (1) 材木街Ⅱ材木町。現在の広島市中区中島町周辺。

〔附記〕

本稿の翻刻には荒木英子氏の多大なご協力を得た。深く感謝いたします。また、本稿を成すにあたり、資料閲覧の許可を頂いた九州大学付属図書館に感謝申し上げます。

本稿は、JSPS科学研究費20K00066の助成を受けたものである。